原典研究

イブン・ハルドゥーン自伝2

訳・註：阿久津正幸
中町　信孝
註：佐藤健太郎

凡例

1　本稿は、以下の訳稿の続編である。

柳谷あゆみ訳、柳谷あゆみ・佐藤健太郎註「イブン・ハルドゥーン自伝」『イスラーム地域研究機構ジャーナル』一、二〇〇九年、四五－五八頁（以下、「イブン・ハルドゥーン自伝」と略記）

翻訳の底本は、以下のイブン・ターウィートによる校訂版を用いた。

Ibn Khaldūn, *al-Ta'rīf bi-Ibn Khaldūn wa Riḥlat-hu sharqan wa gharban*, ed. Muḥammad ibn Tāwīt al-Ṭanjī, Cairo: Maṭba'at Lajnat al-Ta'līf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1951（以下、*al-Ta'rīf*と略記）

また、翻訳にあたっては以下のフランス語訳を適宜参照した。

Ibn Khaldûn, *Le Livre des exemples. T.1 Autobiographie, Muqaddima*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard, 2002（以下、*Autobiographie*と略記）

2　当然のことながら、イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』および彼の史書『省察すべき実例の書』は、彼の自伝を読み解くうえで参考になるところが多い。主に使用したのは、以下の校訂版および日本語訳である。

Ibn Khaldūn, *Tārīkh Ibn Khaldūn al-musammā bi-Kitāb al-'Ibar*, 7vols., Beirut, 1971（ブーラーク版のリプリント。以下、*al-'Ibar*と略記）

Prolégomènes d'Ebn Khaldoun: texte arabe publié d'après les manuscrits de la Bibliothèque impériale, ed. M. Quatremère, Paris, 1858（註では*Prolégomènes*とした）

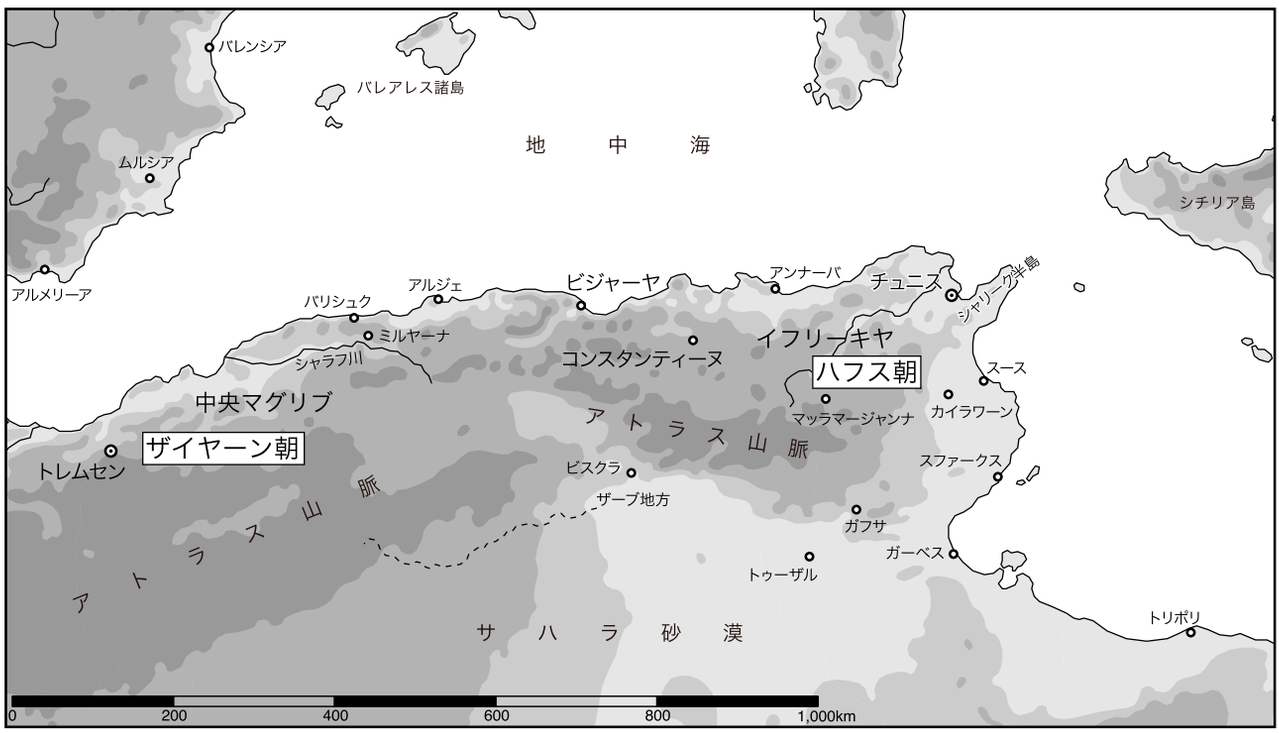
イブン・ハルドゥーン著、森本公誠訳『歴史序説』全四巻、東京：岩波書店（岩波文庫）、二〇〇一年（以下、『歴史序説』と略記）

3　訳文と原文の対照がしやすいよう、訳文中に//p.002//などとして校訂版のページの切れ目を示した。

4　年代は、訳文ではアラビア語原文のヒジュラ暦表記を西暦に換算した上で、ヒジュラ暦／西暦の形式で記した。一方、註では必要な場合を除いて西暦のみ記した。ヒジュラ暦を西暦に換算する際、年代を決定しがたい場合には「六八五／一二八六－七」とした。

5　訳文中の括弧のうち、［　］は訳者による語句の補足、（　）は簡単な語彙の説明や言い換えである。また、『　』は書名を示す。【　】は訳註者が付け加えた小見出しである。長文にわたる引用は、一段下げて記した。

6　アラビア語のカナ表記は大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京：岩波書店、二〇〇二年の方式に拠った。



イフリーキヤと中央マグリブ

イフリーキヤでのイブン・ハルドゥーンの祖先（承前）

シューラーの人々のなかで主導的な立場にあったのは、アブー・マルワーン・バージーだった。それでイブン・アフマルは、彼らに対抗して、［アブー・マルワーン・］バージーへの服従を拒否し、ときにはイブン・フードやアブドゥルムウミン家のマラケシュの支配者に、またあるときにはイフリーキヤの支配者であるアミール・アブー・ザカリヤー[1]に忠誠を誓った。こうしてイブン・アフマルはグラナダに居を定めると、そこを王宮の所在地とした。

ところで、フルンティーラやその地の都市は、［イブン・アフマルの］支配が及ばないままだったので、ハルドゥーン家は、//p.011//異教徒の王による悪しき結末を怖れて、セビーリャから対岸[2]へ移動して、そしてセウタ[3]に落ち着いた。［やがて］この境域を異教徒の王が獲得し、コルドバ、セビーリャ、カルモーナ、ハエンその他を、二〇年かけて支配していった[4]。

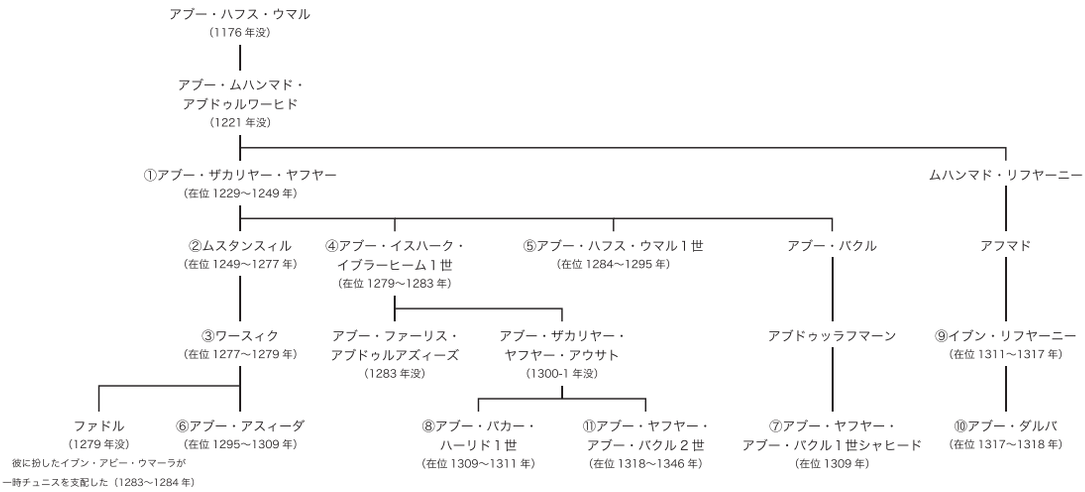
ハルドゥーン家がセウタに到着したとき、アザフィー[5]が息子や娘を通じて彼らと婚姻関係を結び、親交を深めた。アザフィーには、このようなハルドゥーン家との関係があったのだが、そのときのわれわれの祖先とは、ハサン・イブン・ムハンマド[6]だった。彼はイブン・ムフタスィブ[7]の孫にあたり、一緒に海を渡った人々とともに［イフリーキヤに］やってきた人物であった。

それで、アミール・アブー・ザカリヤーのもとで、祖先が保っていた過去の関係を思い出すと、ハサン・イブン・ムハンマドはそのもとに向かうことにした。アブー・ザカリヤーを訪ねてみると、彼の到来を歓迎してくれた。［その後］彼はマシュリクに旅立ち、果たすべき［巡礼の］義務を果たすと、再び［イフリーキヤに］戻って、ブーナ[8]でアミール・アブー・ザカリヤーと出会った。アブー・ザカリヤーは彼を歓迎してくれたので、王朝の保護とアブー・ザカリヤーの厚遇という恵まれた環境にいることができた。アミール・アブー・ザカリヤーは、彼に恩給（リズク）を配分して土地（イクター）も与えてくれた。

ハサン・イブン・ムハンマドはこの地で没し、埋葬された[9]。ハサン・イブン・ムハンマドは、息子のアブー・バクル・ムハンマド[10]を後継ぎとして残していたが、こうした庇護と恵まれた環境のなかで、その息子（ア

ブー・バクル・ムハンマド）も育つことができた。アミール・アブー・ザカリヤーが、［六］四七／一二四九年にブーナで没すると、その息子ムスタンスィル・ムハンマド[11]が後を継いだ。ムスタンスィル・ムハンマドは、父親と同様にわれわれの祖先アブー・バクル［・ムハンマド］を扱ってくれた。

系図　初期ハフス朝（1229〜1346 年）



それから長い時が刻まれ、［六］七五／一二七七年にムスタンスィル・ムハンマドが亡くなった。それでその息子ヤフヤー[12]が後を継いだ。すると、故ムスタンスィル・ムハンマドの兄弟であるアミール・アブー・イスハーク[13]が、アンダルスから戻ってきた。//p.012//かつてムスタンスィル・ムハンマドから逃亡していたのだが、このヤフヤーを廃位して、彼がイフリーキヤの単独の支配者となった。そしてムワッヒドゥーン[14]の高官たちの従来の慣習に基づいて、国事にかかわる職務[15]のなかでも、租税にかんする徴税官を任免したり、税の査定を監督したりする独占的な任務を、われわれの祖先アブー・バクル・ムハンマドに任せた。そのため彼は、この地位で傑出した人物となった。

その後、スルターン・アブー・イスハークは、後取り息子だがビジャーヤ[16]に追放していたアブー・ファーリス[17]のハージブ職[18]に、アブー・バクル・ムハンマドの息子であり、われわれに最も近い祖先（祖父）であるムハンマド[19]を任命した。やがて、われわれの祖先ムハンマドは、その職を辞したいと願い出て、スルターンもそれを了承したので、彼は王の都（チュニス）に戻った。

［その後］僭称者のイブン・アビー・ウマーラ[20]が、チュニス[21]のこの王権（ハフス朝）を奪ったとき、われわれの祖先アブー・バクル・ムハンマドの身柄を拘束し、その財産を没収した。その後、彼を勾留したまま絞殺してしまった。それでその息子であり、われわれの最も近い祖先（祖父）ムハンマドは、スルターン・アブー・イスハークやその息子たちとともに、ビジャーヤに向かった。すると［ビジャーヤに追放されていた］息子アブー・ファーリスがスルターンを捕らえてしまった。それからアブー・ファーリスは、兄弟とともにイブン・アビー・ウマーラを迎え撃つために、軍隊を伴って出発した。このイブン・アビー・ウマーラは、廃位された君主（ワースィク）の息子ファドル[22]を装っていたのだった。

彼らがマッラマージャンナ[23]で交戦すると、われわれの祖父ムハンマドは、アミール・アブー・ザカリヤーの息子、アブー・ハフス[24]とともにこの修羅場から逃亡した。二人には、ファーザーズィー[25]、アブー・フサイン・イブン・サイイドゥンナース[26]も同行し、スィナーン砦[27]を避難所として逃げ込んだ。//p.013//

ファーザーズィーは、主人アブー・ハフスの［古くからの］従臣の一人であり、他の誰よりも優遇されていた。一方のアブー・フサイン・イブン・サイイドゥンナースは、ファーザーズィーが優遇されていたことを苦々しく思っていた。なぜなら彼らの故郷セビーリャでは、ファーザーズィーよりも高い地位にあったからである。そこで彼は、トレムセン[28]で主人のアブー・ザカリヤー・アウサト[29]に仕えることになったのだが、この件についてはすでに述べた通りである[30]。

［祖父の］ムハンマド・イブン・ハルドゥーンはというと、アミール・アブー・ハフスとともに行動していたが、ファーザーズィーへのひいきに不満

を漏らすことはなかった。［その後］アブー・ハフスが権力を握った後も、［祖父の］ムハンマドをそれまでどおりに扱った。彼に土地を与え、将軍や軍人たちの列に加えた。王位を取り巻く多くの高官たちのなかでも、王は彼に満足していたために、ファーザーズィーの後任として彼をハージブ職に推したが、アブー・ハフスは亡くなってしまった。

［その後］その兄弟ムスタンスィル・ムハンマドの孫アブー・アスィーダ[31]がスルターンになった。そしてハージブ職には、ファーザーズィーの書記、ムハンマド・イブン・イブラーヒーム・ダッバーグ[32]を選び、［祖父の］ムハンマドはその次の候補とした。こうした状況は、スルターンが亡くなるまで続いた。

アミール・ハーリド[33]の治世になると、［祖父の］ムハンマドに敬意を表した配慮はつづいたが、［実際に］重用されることも任命されることもなかった。

しかし、アブー・ヤフヤー・イブン・リフヤーニー[34]の治世になると、彼も［何かと］重用されるようになった。アラブ遊牧民[35]の制圧に尽力すると、スルターンはそれに満足し、さらにダラージュ族[36]からジャズィーラ[37]を防衛するために、［祖父の］ムハンマドを派遣した。この部族は、ジャズィーラ方面にいたスライム族の一支族だった。この任務でも、［祖父の］ムハンマドには著しい功績があった。

アブー・ヤフヤー・イブン・リフヤーニーの治世が終わると、［祖父の］ムハンマドはマシュリクに旅立ち、［七］一八／一三一八年に［巡礼の］義務を果たしたが、前非を悔い改め、［現世を］投げ捨てたいという念にとらわれるようになった。それで［七］一三／一三一三年、自発的に巡礼を再度行ってからは、自宅の一室に籠もるようになった。それでも［次の］スルターンのアブー・ヤフヤー[38]は、彼が所有していた土地（イクター）や俸給などの多くを、温情としてそのままにしてくれた。スルターンのハージブ職への就任もたびたび要請してくれたが、彼はそれも断った。//p.014//

ムハンマド・イブン・マンスール・イブン・ムズニー[39]は、私（イブン・ハルドゥーン）にこう語ってくれた[40]。

ミズワール[41]と呼ばれていた、ハージブのムハンマド・イブン・アブドゥルアズィーズ・クルディー[42]が七二七／一三二七年に亡くなったとき、スルターン（アブー・ヤフヤー）はあなたの祖父ムハンマド・イブン・ハルドゥーンを招聘したのだ。スルターンは、ハージブ職へ彼を就任させて、職務を任せることを望んでいた。しかし彼は固く辞退したので、スルターンはそれを受け入れて、［代わりに］任命すべき人物を相談した。すると彼は、資質と能力の点で適格であること、またチュニスとセビーリャで、両家（ハルドゥーン家とサイイドゥンナース家）の祖先たちには旧交があったことなどから、境域にあるビジャーヤの支配者、ムハンマド・イブン・アビー・フサイン・イブン・サイイドゥンナース[43]を推薦した。彼はスルターンにこう言った。「お側に仕える臣下のなかで、彼はその職務に最も高い能力をもつ人物です」。それでスルターンは進言に従って、［ムハンマド・］イブン・サイイドゥンナースを招聘して、ハージブ職に任命したのだ。

スルターン・アブー・ヤフヤーは、その見識を信頼して頼りにしていたために、われわれの祖父ムハンマドが［七］三七／一三三六年に亡くなるまで、チュニスの留守役を任せていた。

その息子、つまり私（イブン・ハルドゥーン）の父であるアブー・バクル・ムハンマド[44]は、軍務と宮仕えの道を避けて、学問と修道場[45]の道に傾倒していた。それらを、法学者と呼ばれていた、アブー・アブドゥッラー・ズバイディー[46]直々に手ほどきを受けていたからだった。ズバイディーは、学問とファトワー（法的見解）にかんしては、当時のチュニスで抜きんでた人物だった。また、聖者[47]として名高い、彼の父フサインとおじハサンから受け継いだ、神に近づくための修行法を身につけていたことでも群を抜いていた。

私の祖父――アッラーが彼を慈しみますように――[48]は、宮仕えを辞したその日から、ズバイディーの修行に加わった。そして息子、つまり私の父――アッラーが彼を慈しみますように――も、彼に師事させていた。それで父は、彼について学び、また法学も習った。父はアラビア語の教養に秀でており、詩作にかんする技法でも見る目をもっていた。父の批評を求めて、文人たちが自らの作品を父に朗誦していたのを、私は知っている。//p.015//黒死病[49]によって、父は七四九／一三四八年に没した。

イブン・ハルドゥーンの生い立ちと教えを受けた先生[50]について

【イフリーキヤの知識人たち】

一方、私（イブン・ハルドゥーン）自身の生い立ちだが、七三二年ラマダーン月一日／一三三二年五月二七日にチュニスで生まれ、思春期まで父――アッラーが彼を慈しみますように――の庇護のもとで育った。

それから私は、手習いの師範としても名高い、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・サアド・イブン・ブッラール[51]に、クルアーンを習った。この先生は、アンダルスのバレンシア[52]地方の移民の出であり、バレンシアとその近隣の先師たちから教育を受けた。この先生は、他に比肩されることのないほどのクルアーン読誦学の第一人者であった。先生自身が師事した、クルアーンの七読誦法の先師たちのなかで、最も著名な一人としてアブー・アッバース・アフマド・イブン・ムハンマド・バタルニー[53]がいた。そのバタルニー師が教えを受けた先師たちや学統[54]もまた、広く知れわたっていた。

私はクルアーンを暗記したあと、イブン・ブッラール先生のもとで、広く認められた七通りの読誦法に従って、イフラードとジャムウの方法で計二一回、クルアーンの通読を行った[55]。その後もう一度、七通りの読み上げをジャムウで行った。//p.016//それから、ヤアクーブ[56]の読誦法を、［それを後世に伝えた］二つの経路に基づいて、先生の指導のもとジャムウの方法で一度の通読を行った[57]。

また私は、イブン・ブッラール先生――アッラーが彼を慈しみますように――の［指導の］もとで、シャーティビー[58]の二つのカスィーダ詩[59]、クルアーン読誦法についての『ラーム韻詩』とクルアーン綴字法についての『ラー韻詩』を読み上げた。この二つは、バタルニー師やその他先生自身が習った先師たち［の権威］を通じて、私に伝えてくれたものである。

また、イブン・アブドゥルバッル[60]の『ムワッタア中のハディースの吟味』をイブン・ブッラール先生に読み上げた。これは、イブン・アブドゥルバッルの『ムワッタアの概説書』から、ハディースの部分だけを抜粋した著作である。

ブッラール先生には、さらに多くの書物を学んだ。たとえばイブン・マーリクの『簡易化の書』[61]や、//p.017//法学にかんするイブン・ハージブの『抄録』[62]などがある。しかしこの二書については、しっかりと体得するまでには至らなかった。

こうした間、私は父やチュニスで師事した先生たちから、アラビア語にかんする諸学も学んだ。チュニスでの先生には、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アラビー・ハサーイリー師[63]がいた。この先生は文法学の第一人者で、［イブン・マーリクの］『簡易化の書』を完全に注釈した書がある。

その他には、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・シャウワーシュ・ザルザーリー[64]や、アブー・アッバース・アフマド・イブン・カッサール[65]がいた。イブン・カッサール先生は、文法学の素養にかんしては非常に関心をそそられる先生だった。また、預言者を賞賛した著名なカスィーダ詩である『外套（ブルダ）』[66]の注釈も書いていた。チュニスで先生は、いまもご健在である。

さらには、チュニスのアラビア語と文芸（アダブ）の第一人者である、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・バフル[67]がいる。私はこの先生の講義に出席して、多くを得ることができた。先生は言語の学問にかんしては、溢れんばかりの大海のような知識をもっており、詩を習得するよう私に指導してくれた[68]。それで私は、［ジャーヒリーヤ時代の］六つの詩とハマーサ詩集に対するアアラム[69]の［注釈の］書、ハビーブの詩[70]、//p.018//ムタナッビーの詩[71]や『歌の書』[72]の詩の一部を心に刻み込むようしっかりと学んだ。

また、チュニスにおけるハディース伝承者たちの第一人者で、二度にわたって［マシュリクへの］リフラ（旅）を行ったことでも名高い、シャムスッディーン・アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・ジャービル・イブン・スルターン・カイスィー・ワーディーヤーシー[73]の講義にも出席した。私はこの先生に、わずかな「狩猟の章」を除いて、ムスリム・イブン・ハッジャージュの書[74]を学んだ。一方『ムワッタア』は、最初から最後までを習った。また母なる五書のいくつかも習った[75]。

先生は、私が学んだアラビア語や法学にかんする多くの書物にかんして認めてくれ、//p.019//すべてを習得したというイジャーザ[76]を与えてくれた。また、先生自身の『履歴』のなかに言及されている先師たち［の権威を通じて学識］を伝えてくれた。そのなかでチュニスで最も知られていたのは、大カーディー[77]のアブー・アッバース・アフマド・イブン・ガンマーズ・ハ

ズラジー[78]だった。

法学にかんしても、私はチュニスで多くの人々から学んだ。アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アブドゥッラー・ジャイヤーニー[79]や、アブー・カースィム・ムハンマド・クサイル[80]などである。クサイル先生には、アブー・サイード・バラーディイー[81]の『改訂』を教わって、法学を学んだ。これは『編纂』[82]を抄録したマーリク派法学の書物である。

この間私は、われらが師であり大カーディーでもある、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・アブドゥッサラーム[83]――アッラーが彼を慈しみますように――の講義に、兄ムハンマド――アッラーが彼を慈しみますように――とともにしばしば参加し、多くを学ぶことができた。このとき私は、先生からマーリク師の『ムワッタア』を学んだ。イブン・アブドゥッサラーム先生は、精神的に混乱をきたす前のアブー・ムハンマド・イブン・ハールーン・ターイー[84]を通じて、『ムワッタア』を伝えてきた高い学統を保持していた……［その他のチュニスの先師たち］……[85]私はそれらすべて［の先師たちの学統］を学び、アブドゥッサラーム先生はそのイジャーザを書き与えてくれた。しかしその後、これらの先生たちはみな、黒死病で召されてしまった。

【イフリーキヤに到来したマグリブの知識人たち】

［七］四八／一三四七年、スルターン・アブー・ハサン[86]がイフリーキヤを掌握すると、スルターンの一行とともに、学者たちの一団がわれわれのところ（チュニス）へやってきた。スルターンは、ウラマーを参加させることで、マジュリス[87]を飾り立てていたのだった。

そのなかには、マグリブ[88]でのファトワー（法的見解）の権威で、マーリクの学派の指導者でもある、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・スライマーン・//p.020//サッティー[89]がいた。私は、その講義をたびたび訪れては、多くを学ぶことができた。

その他には、スルターン・アブー・ハサンの書記を務め、スルターンの書状の末尾の代署の書き手であり、マグリブのハディース学者と文法学者たちの第一人者、アブー・ムハンマド・アブドゥルムハイミン・イブン・アブドゥルムハイミン・ハドラミー[90]がいた。私はこの先生に師事して、母なる六書、『ムワッタア』、イブン・イスハーク[91]の『預言者伝』、イブン・サラーフ[92]のハディースにかんする書、その他私の記憶から消えてしまった多くの書物を習った。私は、これらすべてに対して、聴講記録とイジャーザをもらった。

先生がもっていたハディースにかんする蓄えは売るほどであり、その在庫はたっぷりあった。記録においても記憶においても、間違いはなかった。先生には、ハディース、法学、アラビア語、文芸（アダブ）、理性の学問[93]などすべての分野にわたる、三千冊を超える書庫があった。これらの書物すべては正確に校合されたものばかりだった。そのなかのある詩集であっても、その信頼性は十分であり、原著者にまで遡る典拠をもつことで知られた先師たちが著述したものばかりであった。いまの時代となっては、原著者にまで遡る典拠が貴重となってしまった、法学やアラビア語の書までもあった。

その他に、アブー・アッバース・アフマド・ザワーウィー師[94]がいた。この先生は、マグリブのクルアーン読誦者の第一人者で、私はクルアーンを習った。それは、アブー・アムル・ダーニー[95]と、//p.021//イブン・シュライフ[96]が伝えた七読誦法に従ったジャムウ・カビールの方法であったが、一度の通読を行っていた最中で中断してしまった。私は、その他多くの書物もこの先生に習い、すべてを習得したというイジャーザをいただいた。

その他に、理性の学問の権威である、アブー・アブドゥッラー・ムハンマド・イブン・イブラーヒーム・アービリー[97]もいた。この先生はトレムセン出身のトレムセン育ちで、数学の書物を習って熟達した。七〇〇／一三〇〇年頃、［マリーン朝による］トレムセンの大攻城戦[98]が暗い陰を落とし始めたために、トレムセンを離れて巡礼に向かうと、当時のマシュリクの著名人たちと出会ったが、彼らからは何も学ばなかった。なぜなら先生は、精神に異常をきたして錯乱していたからであった。

それでマシュリクから戻って回復すると、アブー・ムーサー・イーサー・イブン・イマーム師[99]に、論理学、［宗教と法学にかんする］二つの基礎[100]を学んだ。このアブー・ムーサー・イーサー・イブン・イマームは、兄弟のアブー・ザイド・アブドゥッラフマーン[101]とともにチュニスで、その名も高いイブン・ザイトゥーン[102]の弟子たちに学んでいた。その後、理性の学問や伝承の学問など多くをトレムセンにもたらしたのだった。それゆえアービリーは、前述したように、［トレムセンで］この兄弟のうちの一人、アブー・ムーサー・イーサー・イブン・イマームに学んだのだった。

その後アービリーは、マグリブに逃れるためにトレムセンを去った。というのも当時のスルターンである、ヤグムラーサン・イブン・ザイヤーンの子

孫のアブー・ハンムー[103]が、彼に財務の管理や課税額の査定を行わせようとしたからであった[104]。それで彼はマグリブに逃れて、マラケシュに到着した。そこで、非常に名高い学者のアブー・アッバース・イブン・バンナー[105]に師事した。アービリーは、その先生から//p.022//理性の学問すべてを獲得し、マラケシュでのイブン・バンナーの地位を受け継ぎ、さらにはそれを高めたのだった。

その後、先生（イブン・バンナー）が亡くなると、アリー・イブン・ムハンマド・イブン・トゥルーミート[106]が、彼に学びたいと要望したので、アービリーはハスクーラ族の山に登って、彼に多く［の学識］を与えることになった。数年後、マグリブの王、スルターン・アブー・サイード[107]がイブン・トゥルーミートを降伏させ、新都（新フェズ）[108]に住まわせた。それでアービリーも、イブン・トゥルーミートに同行して移動した。

その後、スルターン・アブー・ハサンがアービリーに目をかけて、彼のマジュリスのウラマーの一員に加えた。この間アービリーは、理性の学問の教育を行い、マグリブの人々にそれを広めた。最終的には、マグリブ中の都市の多くの人々がそれに熟達するまでになった。老若問わず一緒になって、彼の教育を受けたのだった。

チュニスに、スルターン・アブー・ハサンの一団とともにアービリーがやってくると、私は師事して、二つの基礎、論理学、その他叡智の学問や数学などすべてを学んだ。アービリー――アッラーが彼を慈しみますように――は、それらにかんして、私が優秀だったと証言してくれた。

スルターン・アブー・ハサンの一団としてやって来た者の中には、我らの友、アブー・カースィム・アブドゥッラー・イブン・ユースフ・イブン・リドワーン・マーラキー[109]がいた。彼はスルターンの書記を勤めており、その当時の書記たちの長であったアブー・ムハンマド・アブドゥルムハイミンの配下として仕えていた。アブドゥルムハイミンは代署の書き手であった。命令書や書簡の最下部に、スルターンの代わりに彼が署名を書き、スルターンはその一部を自ら書いたのである。

このイブン・リドワーンは、字の上手さ、知識の多さ、//p.023//行いの良さ、文書作成[110]の巧みさ、および、スルターンの書状作成、詩作、ミンバルでの説教――彼はスルターンとともに礼拝を行うことが多かったのであるが――における雄弁さにかけては、マグリブが誇るべき人物であった。彼がチュニスの我らのもとにやって来ると、私は彼と近づきになって喜んだ。年が近いため彼を師と仰ぐことこそなかったものの、他の者からと同様に、私は彼から多くを学んだ。

【ラハウィーの頌詩】

かつて彼のことを、我らの友にしてチュニスの詩人のアブー・カースィム・ラハウィー[111]が、ヌーンの脚韻を持つカスィーダ詩で讃えた。それは、スルターン・アブー・ハサンを讃えてバーの脚韻詩で詠んだ頌詩をスルターンに上奏してくれるよう、彼の師であるアブー・ムハンマド・アブドゥルムハイミンに思い起こしてもらうことを望んでのことであったが、その詩については、スルターンの条の中ですでに述べた[112]。

［ラハウィーは］イブン・リドワーンへの頌詩の中で、スルターンとともにやって来た著名なウラマーたちについて、次のように述べている。

私は知った、知識を拒むべき時を
私は確信した、土星の相は運がないと
［星々から］導かれる吉凶判断[113]には選択の余地はなく
我が友にとっての合[114]に争いの余地はないと
星位[115]の秩序こそまったき秩序
どんなに脆弱であろうと兆候を読む者には理がある
人の欠乏はその脊椎[116]にあり
理性ある者さえその重さには困惑する//p.024//
甘言を予期していれば、私は恐れない
喜ぶ者の陽気さも怒れる者の悪意も
炎に向かっても、その光の輝きが私を眩ませはしない
あらゆる炎がムーサー・イブン・イムラーン[117]の炎ではないのだ
私にとって未だ叶わぬ願いとは
イブン・リドワーンとまみえることと、喜びの楽園に至ることのみ
そこで私は最も高き人々を見出す
彼らはガッサーン［族］[118]の誇りすらかすむような人々を祖先に持つ
私は礼儀作法の庭園からの果実によって供され
知識の宝庫からの純金をもって生かされる
そこで歩き回れば必ずや得るものがあり
耳で知っていたことをこの目で見て納得する

彼の諸作法はすべてが満ち足り、そのどれもがお前の取り分
　真珠と珊瑚に飾られてお前に命を与える
イブン・サフル[119]の紙にもブーラーン[120]の首にも結わえられたことのない
　素晴らしい紐でお前に命を与える
だから言え、もし彼が一言ささやくなら「バビロン人[121]なり」と
　紙を飾るなら「サヌア人[122]なり」と言え
被造物はただ作られるのではなく
　恩寵と慈悲を与えることによって完成されるのだ

それから彼は、やって来たウラマーたちについてこのように言う。

彼らはみなその思慮深さが
　サビールとサフラーン[123]の両山よりも盤石なる人々
彼らにはいかなる軽率さもなく
　その知識の旗は明かりを用いずともお前を導く//p.025//
アスバヒー[124]は法学によって夜明けを待ち
　アシュハブ[125]は星々によって彼の導きを求める
論敵への弁論と雄弁術のなんと立派な美しさ
　どんなに隠された中にも明らかな証拠をもたらす
作法の庭園には彼らの雲が慈雨をもたらし
　忘却の裾でサフバーン[126]をぬぐい去る
世の諸都市に向けてイブン・イマームの敷居は高くない
　トレムセンの山すそゆえに
サッティーは遠く離れ、バグダードの御世には
　フェズの斧は名誉にかけてバグダードを攻撃しない
大地はアービリーに大雨で潤されることを求める
　雨を求める者は彼を離れて輿に乗ることはない
チュニスはアブドゥルムハイミンに恋し
　彼との絆と親密さを得た
私のさまざまな思いは彼以外にはかからない
　イブン・リドワーンの愛でもってすべてを愛することができるならば

この詩人、我らが友ラハウィーは、アブドゥルムハイミンを回想してこう書いた。

　魂とは何かを得ようと努めること
　命とは何かを奪おうと競うこと
私は知っている、人々には正しさを追求し導きを求める者と
　害悪を追求する者とがいることを
私は知っている、知識は被造物を彩る飾りであることを
　被造物は知識によってもっとも美しき衣服をまとう[127]
私は知っている、あらゆる美徳は
　イブン・アブドゥルムハイミン・ハドラミーの中にあることを
柱高き（高貴にして）至高なる王権の御前において
　彼は高き位階に座を占める//p.026//
諸地方に命令を広めた一本のペン
　それにはすべての反逆者が従った
運命の前では何の警戒も役に立たぬもの
　運命が何によって事を決めるのか、お前には分からぬだろう
彼は偉大さと高さを与え
　豊かな贈り物ですべての者を友となす
鎧武者すら恐怖に駆られ彼のもとに逃げこむ
　彼はマシュラフィー剣[128]にも動じない
彼はあらゆる時代を通じて最高のペン
　その源はイマーム・アリー[129]に遡る
彼のその比類無き技は
　あらゆる輝かしき意味における卓越性で飾られる
秩序正しく真珠に糸を通す者、またある時は
　その真珠を解きほどいて巻き散らす者[130]
バディーウ［ッザマーン］[131]を口ごもらせ
　ブワイフ家のサービー[132]を黙らせる素晴らしき修辞の数々
そしてイラクの唖者（サービー）は彼のもとで知る
　自分はシリアにおける異邦人[133]のようであると
知識とは海のごときもの
　だが潤しに来る者たちはそれを避ける
偉大なるウンマは彼から生じる

朗誦され伝えられる見事な語り口の話とともに
彼の持つ思慮と言葉の美しさによって
彼は盲しいた者たちの視野にも光を置く
文法によってスィーバワイヒ[134]を圧倒する
曖昧さにも明瞭さをもたらして
二人のアフファシュ[135]には彼のことが見えず
ファーリスィー[136]の賢さをもってすら彼の秘密は明かせない
人類の中の知識の権威よ
実に私は寛大さと優しさの主に呼びかける
我が詩想から生まれ出た娘は、あなたの庇護に身をゆだねる
だから喜びの顔色でそれを迎えよ
彼女は希望のはしごに近づくことを
そして高き方へと登ることを欲する
だから彼女に望みを得させよ
あなたは近きも遠きも、欲するあらゆるものをたやすく得たのだから

//p.027//その後カイラワーンにおいて、［七］四九／一三四八年の初頭、スルターンに対するアラブ遊牧民の反乱[137]が起こった。スルターンたちはそのことに掛かりきりになり、このラハウィーは望んだものを得る見込みはなくなった。それから黒死病が到来して、絨毯は巻き取られた（すべては終わった）。他の者たちとともに、アブドゥルムハイミンは亡くなった。彼はチュニスの我々の祖先たちの墓に葬られたが、それは彼らがやって来た際に、彼と私の父――アッラーが彼を慈しみますように――との間にあった友情のゆえであった。

カイラワーンの反乱が生じた際、チュニスの人々はスルターン・アブー・ハサンの一派でチュニスに残っていた者たちに反乱を起こした。［一派は］城塞[138]の王宮に立て籠もり、そこにはスルターンの息子と家族もいた。イブン・ターフラーギーン[139]も、彼（アブー・ハサン）に叛旗を翻した。彼はカイラワーンを出奔し、スルターンを取り囲んでいたアラブ遊牧民のもとへ向かった。彼ら遊牧民がイブン・アビー・ダッブース[140]のもとに集まって彼に忠誠の誓いを立てていたことは、スルターンの条で述べたとおりだが[141]、彼らがイブン・ターフラーギーンをチュニスへ送り出したのである。彼は城塞を取り囲んだが、城塞は彼を寄せ付けなかった。アブドゥルムハイミンは、チュニスの人々の反乱と騒ぎが起こった際、彼の家を出て我らの屋敷を訪れ、私の父――アッラーが彼を慈しみますように――のもとに匿われ、我らのもとに三ヶ月間潜んでいた。その後スルターンがカイラワーンからスース[142]へと逃げ延びて、海を渡ってチュニスに到来し、イブン・ターフラーギーンがマシュリク（東方）へ逃げると、アブドゥルムハイミンは潜伏から脱し、スルターンは彼をもとの地位、代署と書状の職に戻した。彼は私の父――アッラーが彼を慈しみますように――とは何度も会話を交わし、その友誼を感謝したものだ。彼が父に手ずから書き、私が覚えている文句は、次のとおりである。//p.028//

私を賞賛へと向かわせる[143]善行
私は永遠に感謝の念を忘れない
神がイブン・ハルドゥーン[144]に、恵みある生と
楽園での永遠を与えますよう
彼はどれほど奉仕に近づき親しむか
そして行動と言葉によって善をなすか
与えた愛と慈しみの中で
ハドラマウト人を見守る者
アブー・バクルよ、私は一生涯
あなたへの賞賛を言葉と心で繰り返す
あなたの名誉を護るため
私は命が続く限り剣と矛先で戦う
そして私はあなたという友を得た
その愛から手綱を引いて離れていこうとは、私は終生思うまい

【ラハウィーの頌詩の註解：イブン・イマーム兄弟】

ラハウィーが詩に詠んだこれらの著名人は、スルターン・アブー・ハサンのマジュリスでの競い手であり、スルターンがマグリブの人々の中から［チュニスへの］同行者として選び出した者であった。彼らのうち、イブン・イマーム兄弟[145]と言えば、トレムセン地方のバリシュク[146]出身の二人兄弟のことであり、兄の名前をアブー・ザイド・アブドゥッラフマーン、弟の名前をアブー・ムーサー・イーサーと言った。二人の父親はバリシュクのとあるモスクのイマームであったが、当時その町を支配していたズィーリ

ム・イブン・ハンマード[147]は、彼が自分の敵対者の財産を預かっていると疑って、それを出すよう要求した。ところが彼は断って引きこもったので、ズィーリムは彼から金を奪おうと夜押しかけた。彼は抵抗し、殺害された。そしてこの二人兄弟は七〇〇／一三〇〇年代にチュニスへと旅立った。二人はその地でイブン・ザイトゥーンの弟子たちから学問を学び、アブー・アブドゥッラー・イブン・シュアイブ・ドゥッカーリー[148]の一門からも学んだ。//p.029//そして二人は豊かな配分[149]をもってマグリブに戻り、アルジェ[150]に滞在してその地で学問を広めた。バリシュクにはズィーリムが支配していたため、入ることができなかったからである。

マリーン家出身の奥マグリブ[151]の支配者、スルターン・アブー・ヤアクーブ[152]は、その頃長きにわたる有名な包囲戦でトレムセンを圧迫していた。彼は兵をその周辺に展開させて、諸地方、諸都市の多くを征服し、ミルヤーナ[153]を首邑とするシャラフ[154]地方のマグラーワ族[155]の土地を支配した。彼は、アスカル家のハサン・イブン・アリー・イブン・アビー・タッラーク[156]とワルターッジャン家のアリー・イブン・ムハンマド・ハイリー[157]をその地に派遣し、また徴税を確かにし財産を集めるために、この両名とともに書記のマンディール・イブン・ムハンマド・キナーニー[158]も派遣した。この時この兄弟はアルジェを出てミルヤーナに滞在しており、マンディール・キナーニーに気に入られた。彼は二人をそばに召して引き立て、息子のムハンマドの教育のために用いた。

それからマグリブのスルターン、ユースフ・イブン・ヤアクーブが、トレムセンの攻囲中の七〇五／一三〇六年[159]、とある配下の宦官の手にかかって亡くなった。[その宦官は]彼を刺したが、その者は//p.030//火炙りにされて亡くなり、その後は孫のアブー・サービト[160]が、すでに述べたように、様々なできごとがあった後で王位に就いた。彼と当時のトレムセンの支配者アブー・ザイヤーン・ムハンマド・イブン・ウスマーン・イブン・ヤグムラーサン[161]、およびその兄弟のアブー・ハンムー[162]との間で、トレムセンの囲みを解き、諸地方を返還するとの協定が結ばれた。彼（アブー・サービト）はそれを履行してマグリブに帰還した。イブン・アビー・タッラークとハイリーとキナーニーもミルヤーナからマグリブへと帰還すべく出発し、トレムセンを通りかかった。その時この兄弟もキナーニーとともにいたのだが、彼は二人をアブー・ハンムーに引き合わせて二人を讃え、学問における二人の地位［の高さ］を知らせたところ、アブー・ハンムーは二人を気に入り、トレムセンに二人の名で知られるマドラサを建造することにした[163]。二人は、知識人の振る舞いと慣習にのっとり、彼のもとに留まった。アブー・ハンムーが亡くなると、二人はその息子のアブー・ターシュフィーン[164]のもとでも同様にしていたが、やがてマリーン朝のアブー・ハサンがトレムセンに進軍し、［七］三七／一三三七年にその地を武力で征服した。スルターンは、マグリブの地での二人の名声により、彼らにふさわしい信頼を抱いていたので、彼は入城の際に二人を招集し、二人をそば近くに座らせ、二人を誉め讃え、同じ世代の人々よりも二人の地位を高く置いた。スルターンがトレムセンに来る時、または彼ら二人が町の名士とともにスルターンのもとに参上する時には、スルターンはマジュリスを二人で飾るようになった。それから、（アンダルス）遠征に際して彼ら二人を呼び出し、二人はタリーファの戦い[165]に同行し、その後、（トレムセンの）町に戻った。二人のうちアブー・ザイドがその直後に亡くなったが、弟の//p.031//アブー・ムーサーは彼が望んだとおりのその寛大なる庇護の下にそのまま留まった。

［七］四八／一三四七年、すでに述べたとおり、スルターン・アブー・ハサンがイフリーキヤに向かう際、アブー・ムーサー・イブン・イマームを尊重して敬意を払い、高い地位に置き座を近くに与えて同行させた。そしてイフリーキヤを征服すると彼をトレムセンの町に帰らせたが、彼はわずかな間そこに留まってから、［七］四九／一三四八年、黒死病の中で亡くなった。彼ら二人の子孫はトレムセンに残っており、今日に至るまで、その寛大なる［庇護の］道を進み、その頂を上りつつある[166]。

（次号に続く）

【註】

（1）ハフス朝初代君主アブー・ザカリヤー（「イブン・ハルドゥーン自伝」、五三頁）。

（2）al-ʻUdwa. 原義は「対岸」だが、しばしばアンダルスから見て対岸にあたるマグリブを指す語として用いられる。また、双数形 al-ʻUdwatāni として、マグリブ・アンダルス両地域を指すこともある。

（3）Sabta（スペイン語では Ceuta）. ジブラルタル海峡のマグリブ側にある港町。一四一五年にポルトガルに占領され、現在はスペインの統治下。

（4）ここで二〇年というのは、六二〇／一二二〇年代にムワッヒド朝のアンダルス統治が崩壊してからキリスト教徒の征服活動が活発化し、最終的に当時アンダルス最大の都市であったセビーリャが六四六／一二四八年に征服されるまでの期間を指しているのであろう。

（5）al-ʻAzafī, Abū al-Qāsim Muḥammad（一二一一～一二七九年）。アザフィー家はセウタのウラマー名家で、祖父の代からセウタのカーディー職を事実上世襲していた。アブー・カースィム・アザフィーは一二五〇年にセウタに独立の政権を樹立し、以後、一四世紀前半までアザフィー家がセウタを支配した（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 258; John Darek Latham, “The Rise of the ʻAzafids of Ceuta,” in *Israel Oriental Studies* 2, 1972, pp. 263-287; John Darek Latham, “The Later ʻAzafids, ” *Revue de l'Occident Musulman et de la Méditerranée* 15-16, 1973, pp. 109-125; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Azafī”, “Sabta”）。なお、イブン・ハルドゥーン自身の妻も、アザフィー家のうちチュニスに移った一族出身の将軍イブン・ハキームの娘である（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 343; *al-Taʻrīf*, p. 79）。

（6）al-Ḥasan ibn Muḥammad. イブン・ハルドゥーンの高祖父にあたる。彼の代にハルドゥーン家がアンダルスから渡ってきたことについては、『省察すべき実例の書』にも記されている（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 298. ただし、ブーラーク版はこの部分に記述の混乱があるので、ベイルート版も見よ。Ibn Khaldūn, *Tārīkh Ibn Khaldūn*, Beirut: Dār al-Kutub al-ʻIlmīya, 2003, vol. 6, p. 383）。

（7）Ibn al-Muḥtasib. ハサン・イブン・ムハンマドの母方の祖父。彼がハフス朝の初代君主アブー・ザカリヤーがムワッヒド朝のセビーリャ総督だった時に女奴隷を贈ったことで、ハルドゥーン家も後のハフス朝との縁を結ぶことができた（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 298; *al-Taʻrīf*, p. 9;「イブン・ハルドゥーン自伝」、五三頁）。

（8）Būna（現アンナーバ al-ʻAnnāba）. 現アルジェリア東部の港町。当時はイフリーキヤの一部と見なされていた。ローマ時代にはヒッポと呼ばれ、初期キリスト教の教父アウグスティヌスゆかりの土地である（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-ʻAnnāba”）。アブー・ザカリヤーは、六四七／一二四九年にブーナを訪れた際に没しているので、その時にハサン・イブン・ムハンマドと出会ったのであろう（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 280）。

（9）ただし、同じくイブン・ハルドゥーンが記した『省察すべき実例の書』では、ハサンはマシュリクに旅したまま没したと記されている（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 298）。

（10）Abū Bakr Muḥammad ibn al-Ḥasan（一二八三年没）。イブン・ハルドゥーンの曾祖父。すぐ後で述べられているように、ハフス朝の財務行政を統括する職務に任命された（cf. *al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 298, 303）。また、彼が著した書記の手引き書もあるという（É. Lévi-Provençal, “Un recueil de lettres officielles almohades. Étude diplomatique et historique,” *Hespéris* 28, p. 12）。

（11）al-Mustanṣir, Abū ʻAbd Allāh Muḥammad ibn Abī Zakariyāʼ Yaḥyā. ハフス朝第二代君主ムスタンスィル（在位一二四九～一二七七年）。彼の治世はハフス朝初期の繁栄の時代にあたる。モンゴル軍によってアッバース朝が滅ぼされた後、一二五九年にはマッカの太守から一時的にカリフに推戴されたこともあった（Jamīl M. Abun-Nasr, *A History of the Maghrib in the Islamic Period*, Cambridge: Cambridge University Press, 1987, pp. 120-122; *al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 280-296）。

（12）al-Wāthiq, Abū Zakariyāʼ Yaḥyā ibn al-Mustanṣir. ハフス朝第三代君主ワースィク（在位一二七七～一二七九年）。（Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, p. 123; *al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 296-297）。

（13）Abū Isḥāq Ibrāhīm ibn Abī Zakariyāʼ Yaḥyā. ハフス朝第四代君主アブー・イスハーク・イブラーヒーム一世（在位一二七九～一二八三年）。兄ムスタンスィルに反抗したため、アンダルスに亡命し、ナスル朝から厚遇を受けていた（Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 123-124; *al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 297-299, vol. 7, p. 90; Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa fī Akhbār Gharnāṭa*, ed. Muḥammad ʻAbd Allāh ʻInān, Cairo: Maktabat al-Khānjī, 1973-78, vol. 1, pp. 315-316）。

（14）al-Muwaḥḥidūn. ハフス朝は、アブドゥルムウミン家の政権（ムワッヒド朝）に代わり、自分たちこそがイブン・トゥーマルトによる宗教改革運動の正当な後継者であることを自任して成立した政権である。このため、ハフス朝下においてはイブン・トゥーマルトの宗教改革運動に参加した者たちの子孫が、大きな影響力を持っていた（Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 126-127）。ここでは、このようなイブン・トゥーマルトの支持者の子孫には「ムワッヒドゥーン」という訳語をあて、アブドゥルムウミン家の政権については「ムワッヒド朝」という訳語をあてる（cf.「イブン・ハルドゥーン自伝」、五六頁、註五一）。

（15）ʻamal al-ashghāl. ハフス朝においては税の徴収や国庫からの支出といった財務行政

全般を司る職務のことをこう呼んだ。当初、ムワッヒドゥーンとアンダルスからの亡命者の双方が交互についていたこの職務は、次第にこの種の技術に長けたアンダルス出身者がもっぱら担うようになっていった（*Prolégomenes*, vol. 2, pp. 12, 19-20;『歴史序説』第二巻、一三八頁、一四八－一四九頁）。イブン・ハルドゥーンの曾祖父がこの職務に任命されたのは、アンダルス出身者を行政実務に重用していくこのような流れの一環と見ることができるであろう。

(16) Bijāya. 現アルジェリア東部の港町。イフリーキヤのほぼ最西端にあたる。ハフス朝の王族がたびたびここに割拠して独立した（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Bidjāya"）。

(17) Abū Fāris ʻAbd al-ʻAzīz（一二八三年没）。アブー・イスハークの五人息子の長男。ハージブのアフマド・イブン・サイイドゥンナースが讒言により一二七〇年に処刑された際、彼と親しかったアブー・ファーリスは許されたものの、ビジャーヤの総督に任じられてチュニスから遠ざけられた（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 299）。

(18) ḥājib. マシュリクでは「侍従」と訳されることの多い職務だが、後ウマイヤ朝以後、マグリブやアンダルスにおいては、文武の諸官を束ねる事実上の「宰相」（森本公誠は『歴史序説』において「執権」と訳す）に等しい役割を担うことが多い。イブン・ハルドゥーンによれば、ハフス朝におけるハージブは、当初は君主の家政を取り仕切る執事だったが、次第に文官・武官の様々な役割が付け加えられ、ついには王朝の最高位に達したと説明されている（*Prolégomenes*, vol. 2, p. 13;『歴史序説』第二巻、一三八－一四〇頁）。その他、地域的な相違については、*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ḥādjib".

(19) Muḥammad ibn Abī Bakr Muḥammad（一三三六年没）。イブン・ハルドゥーンの祖父。本文中で述べられているように、一三世紀末から一四世紀初頭にかけて歴代のハフス朝君主によって特に軍務において重く用いられた。

(20) Aḥmad ibn Marzūq ibn Abī ʻUmāra（一二八四年没）。ビジャーヤ出身で元は仕立屋。トリポリ西部でナスィールNaṣīrという廃位されたハフス朝君主ワースィクの子飼いの家来（マウラー）と出会い、ワースィクの息子ファドルに似ていることを伝えられたとされる。これ以降ファドルを自称し、人々の信用を勝ち取ってトリポリを支配した。チュニスのアブー・イスハーク一世は二度にわたって討伐を試みるも失敗した。チュニスに入ったイブン・アビー・ウマーラは、ビジャーヤに逃亡したアブー・イスハーク一世にかわってスルターンと称したが、アブー・イスハーク一世の兄弟、アブー・ハフスに敗北し、殺害された（*al-ʻIbar*, vol.6, pp. 302-305; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 123-124; Khayr al-Dīn al-Ziriklī, *al-Aʻlām: Qāmūs tarājim li-ashhar al-rijāl wa al-nisāʾ min al-ʻArab wa al-musta ʻribīn wa-mustashriqīn*, 8 vols., Beirut: Dār al-ʻIlm al-Malāʾīn, 1989, vol. 1, p. 256）。

(21) Tūnis. 現在のチュニジアの首都で、当時もイフリーキヤの中心であった海港都市。ハフス朝の首都だったが、イフリーキヤ西部のコンスタンティーヌやビジャーヤにもしばしば王族が割拠し、その都度王朝は分裂した。

(22) al-Faḍl. ハフス朝第三代君主ワースィクの幼い三人息子のうちの一人。父親が廃位されたとき三人も殺害された（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 299）。

(23) Marrānājanna. カイラワーンの西、現在のアルジェリアとの国境に近い山地の小都市。マルマージャンナMarmājannaとも呼ばれる（Yāqūt al-Ḥamawī, *Muʻjam al-Buldān*, 5 vols., Beirut: Dār al-Ṣādir, [1955-57], vol. 5, p. 109）。また*al-ʻIbar*でも、後者の読み方に従っている場合もある。

(24) Abū Ḥafṣ ʻUmar ibn Abī Zakariyāʾ Yaḥyā. ハフス朝第五代君主アブー・ハフス・ウマル一世（在位一二八四～一二九五年）。イブン・アビー・ウマーラに追放されたアブー・イスハーク一世の兄弟。のちにチュニスをイブン・アビー・ウマーラから奪回するが、コンスタンティーヌとビジャーヤは甥アブー・ザカリヤー・アウサトの支配下にあり、ハフス朝は事実上東西に分裂した（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 305; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, p. 124）。

(25) Abū ʻAbd Allāh Muḥammad ibn al-Qāsim ibn Idrīs al-Fāzāzī（一二九三－四年没）。ムワッヒドゥーンの一人。後にアブー・ハフス一世が即位すると、彼に重用されて軍事を任されることになる（*al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 304-305, 310）。

(26) Abū al-Ḥusayn ʻAlī ibn Abī Bakr ibn Sayyid al-Nās al-Yaʻmurī（一二九一年没）。父アブー・バクルがムスタンスィルの宮廷に仕えた法学者・ハディース学者だったため、アブー・フサイン自身は宮殿内でハフス朝の王子たちとともに育ったという。アブー・イスハーク一世の治世には兄弟アフマドとともに、一時、権勢を誇った。アフマドの失脚後、マッラマージャンナの戦いを経て、イフリーキヤ西半を支配するアブー・ザカリヤー・アウサトに仕え、没するまでビジャーヤでハージブを務めた。彼の息子ムハンマドについては註43を見よ。なお、サイイドゥンナース家は、ザーヒル派法学を奉じる親ムワッヒド朝的なセビーリャの知識人名家だったが、彼の父アブー・バクルの代にキリスト教徒の征服を恐れてチュニスに逃れてきた（*al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 299, 304, 309：「イブン・ハルドゥーン自伝」、五八頁、註七〇）。

(27) Qalʻat Sinān. マッラマージャンナ近くの城塞（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 304）。

(28) Tilimsān. 現アルジェリア西部の都市で、ザイヤーン朝の首都。

(29) Abū Zakariyāʾ Yaḥyā al-Awsaṭ. アブー・イスハーク一世の五人息子の一人。父がイブン・アビー・ウマーラに殺された際、トレムセンに逃げ延び、ザイヤーン朝に身を寄せていた。彼のもとにイブン・サイイドゥンナースが来たことをきっかけに、アブー・ハフス一世に対抗して挙兵し、ビジャーヤ、コンスタンティーヌを

占領した。以後、没するまでイフリーキヤ西部を支配し、ハフス朝は事実上東西に分裂した（*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 306-308, 315; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, p. 124）。

(30) cf. *al-'Ibar*, vol. 6, p. 306. イブン・ハルドゥーンの自伝は、彼の歴史書『省察すべき実例の書』の一部分として末尾に付されたものであり、歴史の部分で言及した内容をこうした表現で示唆することが多くみられる。

(31) Abū 'Aṣīda, Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn Abī Zakariyā' Yaḥyā al-Wāthiq. ハフス朝第六代君主アブー・アスィーダ（在位一二九五～一三〇九年）。父ワースィクが廃位されて殺された後に生まれ、ひそかにアスィーダ（小麦粉を練って作った食べ物）で育てられたので、アブー・アスィーダとあだ名された。アブー・ハフス・ウマル一世が没した際、その息子が幼少だったため、ムワッヒドゥーンによって選ばれて即位した。（*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 311-312）。

(32) Muḥammad ibn Ibrāhīm al-Dabbāgh（一三〇九年没）。父はセビーリャの人で、キリスト教徒による征服を避けてチュニスに移住した。チュニスで生まれたイブン・ダッバーグは書記術に長けていたため、ファーザーズィーやアブー・アスィーダらによって重用されたが、アブー・バカー・ハーリド一世の即位とともに捕らえられ、獄死した（*al-'Ibar*, vol. 6, p. 312; al-Zarkashī, *Tārīkh al-Dawlataynal-Muwaḥḥidīya wa al-Ḥafṣīya*, ed. al-Ḥusayn al-Ya'qūbī, Tunis: al-Maktaba al-'Atīqa, 1998, p. 125）。

(33) Abū al-Baqā' Khālid ibn Abī Zakariyā' al-Awsaṭ. ハフス朝第八代君主アブー・バカー・ハーリド一世（在位一三〇九～一三一一年）。一三〇〇－一年、父アブー・ザカリヤー・アウサトの後を継いでイフリーキヤ西部の支配者となった。アブー・アスィーダの死をきっかけにチュニスに入城して一時的にハフス朝を統一したが、まもなくコンスタンティーヌで兄弟アブー・ヤフヤー・アブー・バクルが自立して再びハフス朝は分裂状態に陥った（*al-'Ibar*, vol. 6, p. 321; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, p. 125）。

(34) Abū Yaḥyā Zakariyā' ibn Aḥmad ibn Muḥammad al-Lihyānī. ハフス朝第九代君主イブン・リフヤーニー（在位一三一一～一三一七年）。リフヤーニーとあだ名される祖父は、ハフス朝初代君主アブー・ザカリヤーの兄弟にあたる。アブー・バカー・ハーリド一世とコンスタンティーヌに拠ったその兄弟アブー・ヤフヤー・アブー・バクルとの争いに乗じてチュニスを占領した（*al-'Ibar*, vol. 6, p. 324-325; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 124-125）。

(35) al-'Arab. 一一世紀にエジプトのファーティマ朝は、イフリーキヤのズィーリー朝に打撃を与えるためヒラール族およびスライム族からなるアラブ遊牧民を送り込んだ。彼らはやがて大西洋沿岸やサハラ砂漠にまで進出し、それまで都市部に限られていたマグリブのアラブ化を非都市部にまで拡大することになった（Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 69-71）。イブン・ハルドゥーンも、アラブ遊牧民のイフリーキヤ進入について部族ごとに詳述し（*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 12ff）、またマグリブの政治や社会にたいする大きな影響について論じている（『歴史序説』第一巻、三九二頁）。イブン・ハルドゥーンが「アラブ」というときにはもっぱらこの「アラブ遊牧民」という意味であり、近代的な民族としての「アラブ人」ではないことに注意する必要がある。

(36) Dallāj. スライム族に属するアラブ遊牧民の一派（*al-'Ibar*, vol. 6, p. 73; Muḥammad Ḥasan, *al-Madīna wa al-Bādiya bi-Ifrīqiya fī al-'ahd al-Ḥafṣī*, Tunis: Jāmi'at Tūnis al-Ūlā, 1999, pp. 115-116; 'Umar Riḍā al-Kaḥḥāla, *Mu'jam qabā'il al-'arab al-qadīma wa al-ḥadītha*, Dimashq: Maktabat al-Hāshwīya, 1949, vol. 1, p. 384（no. 9）; T. Nishio et al. *A Dictionary of Arab Tribes*, Tokyo University of Foreign Studies, ILCAA, 1999, p. 169）。

(37) al-Jazīra. チュニス湾の東部に突き出た半島。七世紀のアラブ征服軍の指揮官の名にちなんでシャリーク半島とも言う。ハフス朝期にはダラージュ族、リヤーフ族といったアラブ遊牧民が展開し、「部族の半島（al-Jazīra al-Qabalīya）」と呼ばれていた（Muḥammad Ḥasan, *al-Madīna wa al-Bādiya bi-Ifrīqiya fī al-'ahd al-Ḥafṣī*, pp. 198-201; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Djazīrat Sharīk"）。

(38) Abū Yaḥyā Abū Bakr ibn Abī Zakariyā' al-Awsaṭ. ハフス朝第一一代君主アブー・ヤフヤー・アブー・バクル二世（在位一三一八～一三四六年）。兄アブー・バカー・ハーリド一世がチュニスを占領すると、まもなくして留守を預かっていたコンスタンティーヌで自立し、イフリーキヤを二分した。一三一八年にチュニスに入城するが、治世の前半は地方の反乱やザイヤーン朝の進出に悩まされた。治世の後半は姻戚関係を結んだマリーン朝との協力によりイフリーキヤの支配は安定するが、逆にマリーン朝への従属を強めていった（*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 329-331; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 125-128）。

(39) Muḥammad ibn Manṣūr ibn Muzni. 没年不明。ザーブ地方を支配したムズニー族の出身。ムズニー族は、一一世紀にイフリーキヤに到来したアラブ遊牧民のヒラール族の一派で、一三世紀から一四世紀にかけて彼の父マンスールや兄弟ユースフのもとでザーブ地方の事実上の支配者となった（*al-'Ibar*, vol. 6, pp. 405-412）。この一族とイブン・ハルドゥーンとの縁は深く、一三五二年、イブン・ハルドゥーンが従軍していたチュニス軍が敗走した際、このムハンマドと出会い、ユースフ支配下のザーブ地方にしばらく逗留した。祖父の逸話を語ったのは、この時だろうか（*al-Ta'rīf*, p. 56）。後に一三六六年にも、イブン・ハルドゥーンはハージブを務めていたビジャーヤを開城した際、ユースフの息子アフマド・イブン・ムズニーのもとに身を寄せている（*al-Ta'rīf*, pp. 100, 102）。

(40) *al-'Ibar*, vol. 6, pp. 337-338 に同じ内容がより詳しく言及されている。

(41) mizwār. ベルベル語で指導者を意味する単語 amzwaru のアラビア語化した形。マグリブにおいては、スーフィー教団の長やシャリーフの長、部族の長など、様々な意味に用いられる（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Mizwār"）。

(42) Abū ʻAbd al-Allāh Muḥammad ibn ʻAbd al-ʻAzīz al-Kurdī. 一三二七年没。イフリーキヤ西部を支配したアブー・ザカリヤー・アウサトの宮廷でその息子たちと育ち、アブー・ヤフヤー・アブー・バクル二世のチュニス征服に貢献し、その後、一三二一年にハージブに任命された。その出自に関しては、一二五八年にバグダードをモンゴルが占領した年、クルディスターンのシャフラズールからマグリブに到来したクルド人の末裔ということ以外、詳しくは知らないとイブン・ハルドゥーン自身が述べている（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 337）。

(43) Muḥammad ibn Abī al-Ḥusayn ibn Sayyid al-Nās. 一三三二年没。アブー・ザカリヤー・アウサトのハージブを務めたアブー・フサイン・イブン・サイイドゥンナース（註26参照）の息子。強大な権力を握ったために誹謗されて失脚し、拷問を受けて獄死した（*al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 337-338）。なお、旅行家イブン・バットゥータは一三二五年にビジャーヤに立ち寄った際、当時その地を治めていたムハンマド・イブン・サイインドゥンナースの横暴を伝えている（イブン・バットゥータ、家島彦一訳注『大旅行記』東京：平凡社、一九九六－二〇〇二年、第一巻、一二四頁、註三三）。

(44) 一三四八年没。

(45) ribāṭ. スーフィーたちの修行の場。当初、この語は、アラブ・ムスリムの大征服やムラービト朝の宗教運動の中では、信仰のために戦う戦士たちの「砦」というニュアンスが強かった（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ribāṭ"; 私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拝』東京：山川出版社、二〇〇九年、一三五－一六六頁）。

(46) al-Zubaydī, Abū ʻAbd Allāh Muḥammad ibn al-Ḥusayn（一三三九－四〇年没）。旅行家イブン・バットゥータは、一三二五年にトレムセンを訪れた際、チュニスからザイヤーン朝への外交使節として派遣されたズバイディーに会っている（イブン・バットゥータ『大旅行記』第一巻、四〇－四一頁）。

(47) walī. 神に特に近しく、それゆえに神から特別に恩寵を授けられて奇蹟を起こすことができる人物。前近代のマグリブにおける聖者については私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拝』を参照。

(48) raḥima-hu Allāh. 故人に対してつける定型の祈願文。

(49) al-ṭāʻūn al-jārif. 一三四六年、黒海に面する通商都市カッファで始まったペスト（黒死病）の流行は、西アジアや地中海世界、さらにはヨーロッパの北部や西部に拡大した。イフリーキヤには一三四八年に到来し、イブン・ハルドゥーン自身によっても、深刻な影響が報告されている（『歴史序説』第一巻、一〇五頁）。世界史的観点からの考察は、W・H・マクニール著、佐々木昭夫訳『疫病と世界史』東京：新潮社、一九八五年。イスラーム世界における影響については、ジャネット・L・アブー＝ルゴド著、佐藤次高他訳『ヨーロッパ覇権以前：もうひとつの世界システム』東京：岩波書店、二〇〇一年、第二巻、三五－頁参照。なお、スユーティー（一五〇五年没）の記述を分析したAlbārは、ṭāʻūnはペストであると位置づけている。al-Suyūṭī, *Mā warāʼ al-wāʻūn fī akhbār al-ṭāʻūn*, ed. Muḥammad ʻAlī Albār, Beirut : Dār al-Shāmīya, 1997, pp. 7-8.

(50) 知識人に対するシャイフ shaykh は尊称という性格が強いため、「師」、「先生」、「教師」、「大家」などと適宜訳し分けた。

(51) Ibn Burrāl, Abū ʻAbd Allāh Muḥammad ibn Saʻd（一二六九～一三三六年以降没）。クルアーン読誦学の専門家（Saad Ghrab, *Ibn ʻArafa et le mālikisme en Ifriqiya au VIIIe–XIVe siècles*, Tunis: Université de Tunis I, pp. 232-233）。Ibn al-Jazarī, *Ghāyat al-nihāya fī ṭabaqāt al-qurrāʼ*, 3 vols., Cairo: Maṭbaʻt al-Saʻāda, 1933-37, vol. 1, p. 138では、Abū ʻAbd Allāh Muḥammad ibn Saʻdānとも。

(52) Balansīya. アンダルス東部の中心都市。一二三八年にアラゴン連合王国に征服され、多くのムスリムが北アフリカ各地に移住した。一三世紀前半にアンダルスの主要部分がキリスト教徒に征服された結果、このようなアンダルスからの移民（jāliya）の家系が、この時期の北アフリカには数多く見られるようになった。セビーリヤ出身のハルドゥーン家もその一つである。

(53) al-Baṭarnī, Abū al-ʻAbbās Aḥmad ibn Muḥammad（一三〇三年没）。バレンシア近郊のパテルナ Paterna 出身のクルアーン読誦学者（al-Wādī Āshī, *Barnāmaj al-Wādī Āshī*, ed. Muḥammad Maḥfūẓ, Beirut: Dār al-Gharb al-Islāmī, 1982, pp. 66-67; Ibn al-Jazarī, *Ghāyat al-nihāya*, vol. 1, pp. 142-143）。

(54) asānīd. 書物だけからの知識の獲得ではなく、より高く評価される方法として、教師のもとで（書物を含めた）知識を獲得したという人的なつながり（学統）のこと。*Autobiographie*, p. 60, n. 2.

(55) クルアーン読誦法では、開祖に教えを受けた世代のなかの二人を起点にして、各流儀が後の世代に継承されることが理想とされた。イフラード ifrād とは、その二人による二経路のどちらかを、ジャムウ jamʻ とは二経路を学んだことを意味する。ここでイブン・ハルドゥーンは、イフラードの方法で七通りの読誦を（七回の通読）、その後ジャムウの方法で七通りの読誦を（一四回の通読）、合計二一回の通読を行ったことになる。七通り以上の方法でジャムウを行った場合はジャムウ・カビールとして、それ以下のジャムウ・サギールと区別される。読誦法とその伝承の経路については、F. Leemhuis, "Readings of the Qurʾān", ed. J. D. McAuliffe,

Encyclopaedia of the Qur'ān, Leiden: Brill, 2004, vol. 4, pp. 359-60を参照。

(56) Ya'qūb ibn Ishāq ibn Zayd ibn 'Abd Allāh al-Ḥaḍramī al-Baṣrī（七三五～八二一年）。バスラ生まれ、バスラ没。*al-Jāmi'*や*Wujūh al-Qirā'āt*など、クルアーン読誦法の相違にかんする著作があり、十の読誦法に含められる読誦法を創始（al-Ziriklī, *al-A'lām*, vol. 8, p. 195）。

(57) 前註ヤアクーブの読誦法を伝えた弟子筋の二人、Ruways Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn al-Mutawakkil al-Baṣrī（八五二年没）と、Abū al-Ḥasan Rawḥ ibn 'Abd al-Mu'min al-Baṣrī（八四八年没）の双方に基づいた読誦を行ったということ。

(58) al-Shāṭibī, Abū al-Qāsim ibn Fīrruh（一一四四～一一九四年）。アンダルス東部のハティバに生まれ、カイロで没。クルアーン読誦法をラーム（L）の脚韻で記した*Ḥirz al-amānī fī wajh al-tahānī*（通称『ラーム韻詩*al-Lāmīya*』）およびクルアーン綴字法をラー（R）の脚韻で記した*'Aqīlat atrāb al-qaṣā'id fī asnā al-maqāṣid*（通称『ラー韻詩*al-Rā'īya*』）は、イブン・ハルドゥーンも学んだようにクルアーン学の定番的なテキストであった（Ibn Farḥūn al-Mālikī, *al-Dībāj al-mudhahhab fī ma'rifat a'yān 'ulamā' al-madhhab*, ed. Ma'mūn ibn Muḥīy al-Dīn al-Jannān, Beirut: Dār al-Kutub al-'Ilmīya, 1996, pp. 323-324; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "al-Shāṭibī, Abu'l-Ḳāsim";『歴史序説』第三巻、一六九頁、註五、第四巻、二三〇頁、註一）。

(59) qaṣīda. アラブの詩型の一つ。同一の韻律と脚韻をもつ対句であるバイト（bayt）と呼ばれる詩行を、数十から百以上連ねる長詩。一般に、恋人への憧憬を描いた導入部ナスィーブ（nasīb）、砂漠の旅の描写であるラヒール（raḥīl）を経て、詩人自身やその部族を誇るファフル（fakhr）や特定の相手を称えるマドフ（madḥ）などにいたるという構成上の特徴を持つ（山本薫「ジャーヒリーヤ詩の再解釈：アトラール（宿営地跡）モチーフを中心に」『日本中東学会年報』一二、一九九七年、二四五－二七五頁）。

(60)「イブン・ハルドゥーン自伝」、五四頁、註一五参照。『ムワッタア中のハディースの吟味（*al-Taqaṣṣī li-aḥādīth al-Muwaṭṭa'*）』および『ムワッタア中の意味と伝承経路についての概説書（*al-Tamhīd li-mā fī al-Muwaṭṭa' min al-ma'ānī wa al-asānīd*）』は、いずれもマーリク派法学の始祖マーリク・イブン・アナス（七〇八～七九五年）によるハディース集『ムワッタア（踏みならされた道）』に関する書。

(61) Ibn Mālik, Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn 'Abd Allāh（一二〇三－四～一二七四年）、スペイン南部ハエン生まれ、ダマスクス没。韻文でアラビア語文法学をまとめた『千行詩（*al-Alfīya*）』で知られる文法学者。イブン・ハルドゥーンが学んだ『簡易化の書（*al-Tashīl*）』も文法学にかんする著作で、二九以上の注釈がなされている（Kātip Çelebi（Ḥājj Khalīfa）, *Lexicon bibliographicum et encyclopaedicum*, ed. & tr. G. L. Flügel, 7 vols. London & Leipzig, 1835-58, vol. 2, p. 290; al-Ziriklī, *al-A'lām*, vol. 6, p. 233; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ibn Mālik";『歴史序説』第四巻、九一－九二、一三七頁）。

(62) Ibn Ḥājib, 'Uthmān ibn 'Umar（一一七四～一二四九年）。上エジプトのアスナー生まれのクルド系、アレクサンドリア没。マーリク派法学者。『抄録』はマーリク派法学書*Mukhtaṣar fī al-furū'*のことで、*Jāmi' al-Ummahāt*とも呼ばれる（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ibn al-Ḥājib"; al-Ziriklī, *al-A'lām*, vol. 4, p. 211;『歴史序説』第三巻、二一七頁）。

(63) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn al-'Arabī al-Ḥaṣāyirī. 不詳。

(64) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn al-Shawwāsh al-Zarzālī. 不詳。

(65) Ibn al-Qaṣṣār, Abū al-'Abbās Aḥmad ibn Muḥammad al-Azdī（一三八八年以降没）。チュニスの文法学者。彼の通称は、イブン・カッサールではなくカッサールとされることもある（Aḥmad Bābā al-Tinbuktī, *Nayl al-ibtihāj bi-taṭrīz al-Dībāj*, on the margin of Ibn Farḥūn, *al-Dībāj al-mudhahhab*, Cairo, 1932, p. 74; Sa'īd ibn al-Aḥrash, *Burdat al-Būṣīrī bi al-Maghrib wa al-Andalus khilāla al-qarnayn al-thāmin wa al-tāsi' al-hijrīyayn*, Rabat: Wizārat al-Awqāf wa al-Shu'ūn al-Islāmīya, 1998, pp. 185-186）。

(66) *al-Burda*. 預言者ムハンマドに対する頌詩で、預言者から外套を与えられた七世紀の詩人カアブ・イブン・ズハイルによるものと、預言者に外套を着せてもらう夢を見た一三世紀の詩人ブースィーリーによるものの二つが有名だが、ここでは後者のこと（杉田英明「二つの預言者讃歌―改宗譚・奇跡譚とイスラム詩の伝統」『超越性の文学』岩波講座文学八、東京：岩波書店、二〇〇三年、二〇五－二二九頁：H・A・R・ギブ著、井筒豊子訳『アラビア人文学』東京：講談社、一九九一年、二一五－二一六頁：al-Ziriklī, *al-A'lām*, vol. 6, p. 139）。イブン・ハルドゥーン自身もこの詩の注釈を著している（Sa'īd ibn al-Aḥrash, *Burdat al-Būṣīrī*, p. 187）。

(67) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn Baḥr. 不詳。

(68) アラビア語を習得する上で、詩が重要な位置を占めるというイブン・ハルドゥーンの考え方は、「作詩の技巧とその習得方法について」（第五章第五節）『歴史序説』第四巻、一九九－二二二頁参照。

(69) al-A'lam al-Shantamarī, Abū al-Ḥajjāj Yusūf ibn Sulaymān al-Andalusī al-Naḥwī（一〇一九～一〇八三年）。アンダルス西部のシャンタマリーヤに生まれ、セビーリャで没した文法学者。アラブ詩の注釈でも知られ、ここで述べられている二つの書『ジャーヒリーヤ六詩人の詩集の注釈*Sharḥ dawāwīn al-shu'arā' al-sitta al-jāhilīya*』および『アブー・タンマームのハマーサ詩集の注釈*Sharḥ Kitāb al-Ḥamāsa li-Abī Tammām*』を著した。なおジャーヒリーヤ六詩人とは、Imrū' al-Qays、Tarafa ibn al-'Abd、Zuhayr ibn Abī Sulmā、Labīd ibn Rabī'a、'Amr ibn

Kulthūm、'Antara ibn Shaddād のこと（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "al-Shantamarī", "al-mu'allaqāt"; R. A. Nicholson, *A Literary History of the Arabs*, Richmond, Surrey: Curzon, 1993, p. 128; Fuat Sezgin, *Geschichte des arabischen Schrifttums*（*GAS*）, 9vols. Leiden: Brill, 1967（in progress）, vol. 2, p. 109）。

(70) Abū Tammām, Habīb ibn Aws ibn al-Ḥārith al-Ṭā'ī（八四五年没）。アブー・タンマームの名でも知られる。『ハマーサ詩集（武勇詩集）*Dīwān al-ḥamāsa*』のこと（ギブ『アラビア人文学』三三頁：『歴史序説』第四巻、二一二頁：*GAS*, vol. 2, p.66）。

(71) al-Mutanabbī（九六五年没）。「アラビアの文芸批評家たちによって、アラビア最大の詩人、あるいは少なくとも偉大なる最後のアラビア詩人と称されている」（ギブ『アラビア人文学』一二八頁）が、『歴史序説』のなかでイブン・ハルドゥーンは、高く評価していない（『歴史序説』第四巻、二一〇－二一一頁）。

(72) al-Iṣfahānī, Abū al-Faraj（九六七年没）。イスファハーニー編のアラブ古詩と詩人の伝記を収めた集成 *Kitāb al-aghānī* を、イブン・ハルドゥーンは「われわれの知る限りでは、これに匹敵する書物は存在しない。それは、文人のあこがれの標的であり、文人が立ち止まらねばならない終着点である」と評している（『歴史序説』第四巻、一五九－一六〇頁）。

(73) al-Wādiyāshī, Shams al-Dīn Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn Jābir ibn Sulṭān al-Qaysī（一二七四～一三四八年）。チュニス生まれのハディース学者、クルアーン読誦学者。アンダルス南部グアディクス Wādī Āsh 出身の家系で、正確にはワーディー・アーシー al-Wādī Āshī。黒死病によってチュニスで没した。ハディース収集のために東西両世界を旅したことで知られ、またマーリクの『ムワッタア』を広めたヤフヤー・イブン・ヤフヤー（八四九年没）本人に連なる学統をもち、またその教えを受けた人数は、東西で一八〇人に達すると言われる（al-Wādī Āshī, *Barnāmaj al-Wādī Āshī*; Ibn Farḥūn, *al-Dībāj*, p.401）。

(74) Muslim ibn Ḥajjāj（八七五年没）。ブハーリーとならびスンナ派の代表的なハディース集『真正集』を編纂した。邦訳は、磯崎定基、飯森嘉助訳『日訳サヒーフ・ムスリム』全三巻、東京：日本サウディアラビア協会、一九八七年。

(75) このすぐ後の *al-Ta'rīf*, p. 20では「六書」と言及しているが、イブン・マージャを除外した「五書」という言及もなされている（『歴史序説』第三巻、一八六頁、註一参照）。

(76) jāza 'āmma. ここでは、ワーディーヤーシーに教えてもらったことすべてに対するイジャーザを意味する。イジャーザは、師弟間の教育を通じて伝達された知識について、その内容を正しく理解して継承したことを、先生が生徒に対して保証する一種の免状のこと。その免状の条件（ある書物一冊か、教えたことすべてか）、免状の対象（特定の生徒か、講義に参加していた全員か）、さらには免状授受で生じる効用（身分や地位が明確な教員資格を獲得するのかなど）をめぐって、当時の学者たちにも諸説がある。本文以下でも言及される、Ibn al-Ṣalāḥ, *Muqaddima fī 'Ulūm al-Ḥadīth* を参照：（「ハディース授受にかんする方法の第三：イジャーザ」。M. Dīb Albughā ed. Dimashq: Maṭba'at al-Ṣabbāgh, 1404/1984, pp. 86ff.; E. Dickinson tr. *An Introduction to the Science of the Hadīth*, London: Garnet, 2006, pp. 109ff.）。現代の研究では、D. Ephrat, *A Learned Society in a Period of Transition: The Sunni 'Ulama' of Eleventh Century Baghdad*, Albany: State University of New York Press, 2000, p. 69, n. 34.

(77) qāḍī al-jamā'a. マシュリクの qāḍī al-quḍāt と同義。国内のカーディーたちの頂点に立つ存在（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ḳāḍī"）。マグリブの場合について、イブン・バットゥータ『大旅行記』第一巻、一二六頁、註四三。

(78) Ibn al-Ghammāz, Abū al-'Abbās Aḥmad al-Khazrajī（一二〇九～一二九三年）。アンダルスのバレンシアに生まれ、チュニスで没した法学者。一二六四年以降、七回にわたってチュニスの大カーディーに任命された（Ibn Farḥūn, *al-Dībāj*, pp. 135-136; al-Zarkashī, *Tārīkh al-Dawlatayn*, p. 81; イブン・バットゥータ『大旅行記』第一巻、四五頁）。

(79) Abū 'Abd Allāh Muḥammad ibn 'Abd Allāh al-Jayyānī. 不詳。

(80) Abū al-Qāsim Muḥammad al-Qusayṛ. 不詳

(81) Abū Sa'īd al-Barādhī（一〇一〇年頃没）。al-Barādhī と綴ることが多い。カイラワーン出身のマーリク派法学者。彼の著した『編纂の抄録の改訂 *al-Tahdhīb fī Ikhtiṣār al-Mudawwana*』は後述のサフヌーンのマーリク派法学書『編纂』を要約したもので、イフリーキヤでは広く読まれた（Ibn Farḥūn, *al-Dībāj*, pp. 182-183;『歴史序説』第三巻、二一二頁）。

(82) カイラワーンのマーリク派法学者サフヌーン Saḥnūn（八五五年没）の著作。彼の『編纂 *al-Mudawwana*』はマグリブ・アンダルスのマーリク派法学者の中でもっとも権威ある法学書の一つとなった（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Saḥnūn"; Kātip Çelebi, *Lexicon*, vol. 5, p. 477;『歴史序説』第三巻、二一二頁）。

(83) Ibn 'Abd al-Salām, Abū 'Abd Allāh Muḥammad（一二七七～一三四八年）。当時、最も尊敬を集めたマーリク派法学者の一人で、一三二六年以降、数回にわたってチュニスの大カーディーに任じられたが、黒死病によって没した（al-Zarkashī, *Tārīkh al-Dawlatayn*, p. 139; Ibn Farḥūn, *al-Dībāj*, p. 418）。

(84) Ibn Hārūn, Abū Muḥammad 'Abd Allāh ibn Muḥammad al-Qurṭubī（一二〇七～一三〇三年）。コルドバで生まれ、チュニスで没したマーリク派法学者（al-Wādī Āshī, *Barnāmaj*, pp. 51-52; Kaḥḥāla, vol. 6, p. 143）。

(85) この部分は、校訂者ターウィートも前後の文章のつながりに疑問を示している。

Autobiographie, p. 61では、「私には、チュニスで教えを受けたその他多くの先生たちがいた。その先生たちのすべての授業を私は受けた」と訳して、イブン・ハルドゥーンに複数の教師たちがイジャーザを与えたと続けている。しかし原文の動詞は、ajāza-nīであり、その許可を与えた者はアブドゥッサラーム一人と考えるべきだろう。

(86) Abū al-Ḥasan ʿAlī ibn Abī Saʿīd. マリーン朝君主アブー・ハサン（在位一三三一～一三四八年）。現在のモロッコ地域を支配していたマリーン朝の君主で、一三三七年にトレムセンのザイヤーン朝を、一三四七年にチュニスのハフス朝を征服し、マリーン朝の最大版図を築いた（*al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 252ff; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, pp. 110-111）。彼がチュニス征服の際に同行させたフェズの知識人たちの存在は、以下で述べられているように少年イブン・ハルドゥーンに大きな影響を与えた。

(87) majlis. 原義は「座る場所／時」。ここでは、君主が自らの権威を高めるためにそばに知識人をおいて、講義などをさせた一種の宮廷サロン的なもの。宮廷サロン的な事例以外でこの語が現れる際には、「講義」「座」などと文脈にあわせて訳出した。

(88) al-Maghrib. 原義は「日の沈む地」で一般的には、リビア砂漠以西の北アフリカを指す。しかし、イブン・ハルドゥーンがマグリブというときには、自分の故郷イフリーキヤとは区別して、より西の地域を指している事が多い。cf. *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "al-Maghrib".

(89) al-Saṭṭī, Abū ʿAbd Allāh Muḥammad ibn Sulaymān（一三四九年没）。ベルベル系サッタ族の出身で、父の代にフェズに住み着いた家系。マーリク派法学を学び、マリーン朝君主アブー・ハサンに厚遇された。『自伝』中に彼について詳細な説明がある（*al-Taʿrīf*, pp. 31-32; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqtibās fī dhikr man ḥalla min al-aʿlām madīnat Fās*, ed. ʿAbd al-Wahhāb Ibn Manṣūr, Rabat: Dār al-Manṣūr, 1973-4, pp.228-229）。

(90) Abū Muḥammad ʿAbd al-Muhaymin ibn Muḥammad ibn ʿAbd al-Muhaymin al-Ḥaḍramī（一二七七－八～一三四八年）。セウタ出身。ハディース学をはじめとする諸学に通じ、また名文家でもあったため書記としてマリーン朝君主アブー・ハサンに重用された。彼についても『自伝』中に詳細な説明がある（*al-Taʿrīf*, pp. 38-41; *al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 247-248; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqtibās*, pp. 444-445）。

(91) Ibn Isḥāq（七〇四～七六七年）。スンナ派世界で最も流布した預言者ムハンマド伝の著者。イブン・ヒシャームにより編集し直されたものが現在にまで伝わっている（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ibn Isḥāq"）。

(92) Ibn al-Ṣalāḥ, Abū ʿAmr ʿUthmān Ibn al-Ṣalāḥ（一一八一～一二四五年）。彼の『ハディース学序説*Muqaddimat Ibn Ṣalāḥ fī ʿUlūm al-Ḥadīth*』はマシュリクのハディース批判学の伝統を、マグリグに広めた書物とされる（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ibn al-Ṣalāḥ"; 『歴史序説』第三巻、一八五頁、註一）。

(93) maʿqūl. イスラーム誕生以降、独自に発展し伝承manqūlされてきた、宗教にかかわる学問sharīʿに対する、古代ギリシアから継承した学問分野のこと。叡智の学問とも呼ばれ、イブン・ハルドゥーンは、論理学manṭiq、自然学al-ʿilm al-ṭabīʿī、形而上学al-ʿilm al-ilāhī、数学ta'ālīmの四つに大別している（『歴史序説』第三巻、三二八－三三七頁）。

(94) al-Zawāwī, Abū al-ʿAbbās Aḥmad ibn Muḥammad（一三四九年没）。当時のフェズで最も有名なクルアーン読誦学者。美声で知られ、スルターンともに礼拝をおこなっていたという（Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqtibās*, p. 122）。

(95) al-Dānī, Abū al-ʿAmr ʿUthmān ibn Saʿīd（九八一～一〇五三年）。コルドバ生まれ、デニア没のマーリク派法学者、クルアーン読誦学で知られ、イブン・ハルドゥーンは彼がこの学問を完成させたと位置づける。著作は、『七読誦法の容易*Taysīr fī al-qirāʾāt al-sabʿ*』、その他著作は一二〇に達すると言われている（Ibn al-Jazarī, *Ghāyat al-nihāya*, vol. 1, pp. 503-505; Kātip Çelebi, *Lexicon*, vol. 2, p. 487; al-Ziriklī, *al-Aʿlām*, vol. 4, p. 206;『歴史序説』第三巻、一六八頁、註二）。

(96) Ibn Shurayḥ, Abū ʿAbd Allāh Muḥammad al-Ruʿaynī（九九八～一〇八三年）。セビーリャ出身のハディース学者、クルアーン読誦学者（J. Lirola Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, Almeria: Fundación Ibn Tufayl, 2004-, tomo 4, pp. 442-444; al-Ziriklī, *al-Aʿlām*, vol. 6, p. 158; Kātip Çelebi, *Lexicon*, vol. 5, p. 24; Ibn al-Jazarī, *Ghāyat al-nihāya*, vol. 2, p. 153）。

(97) al-Ābilī, Abū ʿAbd Allāh Muḥammad ibn Ibrāhīm（一二八二～一三五六年）。トレムセン生まれでフェズで没した哲学者。もとはアンダルスのアビラĀbila出身の家系。イブン・ハルドゥーンにとっては、最も感銘を受けた師の一人だったようである。したがって、この後、『自伝』中で詳細な説明がある（*al-Taʿrīf*, pp. 33-38）。

(98) マリーン朝君主アブー・ヤアクーブ・ユースフは一二九九年にザイヤーン朝の首都トレムセンの包囲に着手した。この間、トレムセンをさらに取り囲む城壁を築き、近郊に新都市マンスーラal-Manṣūraを建設するなどして攻城戦は一三〇七年に彼が没するまでの八年間にも及んだ（*al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 219-221; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, p. 109）。

(99) Abū Mūsā ʿĪsā Ibn al-Imām（一三四八年没）。イブン・イマーム兄弟（Ibnā al-Imām）のうち弟。アルジェ西方のバリシュク出身。父が故郷のモスクで礼拝指導者（イマーム）をしていたのでこの名で呼ばれる。この後、『自伝』の中で詳細な記述がある（*al-Taʿrīf*, pp. 28-31; Yaḥyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-rurwād fī dhikr al-mulūk min*

Banī ʻAbd al-Wād, Algiers: al-Maktaba al-Waṭanīya, 1980, p. 130)。

(100) 宗教の諸原理 uṣūl al-dīn と法学基礎論 uṣūl al-fiqh。前者の定義は時代によって幅があるが、「すべて神とその使徒がわれわれに与えられた法源としてのクルアーンとスンナであり、加えてこの法源の利用を可能にする関連学問」とされている（『歴史序説』第四巻、一一〇－一一一頁）。

(101) Abū Zayd ʻAbd al-Raḥmān Ibn al-Imām（一三四二－三年没）。イブン・イマーム兄弟のうち兄。弟と同様、『自伝』中に詳細な説明がある（*al-Taʻrīf*, pp. 28-31; Yahyā ibn Khaldūn, *Bughyat al-ruwwād*, p. 130; Ibn Farḥūn, *al-Dībāj*, p. 250）。

(102) Ibn Zaytūn, Abū al-Qāsim ibn Abī Bakr（一二二三～一二九一年）。チュニスの大カーディーを務めたマーリク派法学者であると同時に、論理学なども修めていた（al-Wādī Āshī, *Barnāmaj*, pp. 40-41; al-Zarkashī, *Tārīkh al-Dawlatayn*; p. 92; al-Ziriklī, *al-Aʻlām*, vol. 5, p. 173;『歴史序説』第三巻、一五一頁）。

(103) Abū Ḥammū Mūsā ibn Abī Saʻīd ʻUthmān. ザイヤーン朝第四代君主アブー・ハンムー・ムーサー一世（在位一三〇八～一三一八年）。初代君主ヤグムラーサン・イブン・ザイヤーン（在位一二三六～一二八三年）の孫にあたる。

(104) 財政・財務にかんする職務の任免に関して、特にマグリブの場合の特徴について、『歴史序説』第二巻、一四八－一五〇頁を参照。

(105) Ibn al-Bannāʼ, Abū al-ʻAbbās Aḥmad ibn Muḥammad（一二五六～一三二一年）。マラケシュで建築職人の息子に生まれるも、広範な学問を習得し、宗教 dīn と世俗 dunyā の二分野をものにしたと言われ、特に数学・天文学・占星学に通じていた。習得した自然科学については、Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-iqtibās*, pp. 148-152 が詳しい（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ibn al-Bannāʼ al-Marrākushī"; al-Ziriklī, *al-Aʻlām*, vol. 1, p. 222）。

(106) ʻAlī ibn Muḥammad ibn Turūmūt（一三四八年没）。アトラス山脈南西部に居住するベルベル系ハスクーラ Haskūra 族の一支族ナファール族の指導者。イブン・トゥルーミートは山岳地帯に拠ってマリーン朝に反抗していたが、マリーン朝君主アブー・サイードに投降した。アブー・ハサンのイフリーキヤ遠征にも同行し、黒死病によりチュニスで没した（*al-ʻIbar*, vol. 6, p. 204）。

(107) Abū Saʻīd ʻUthmān ibn Abī Yūsuf Yaʻqūb. マリーン朝第一〇代君主（在位一三一〇～一三三一年）。

(108) al-Balad al-Jadīd. フェズ西郊に王宮および行政の拠点として作られた新都市のこと。マリーン朝第六代君主アブー・ユースフ・ヤアクーブ（在位一二五八～一二八六年）が、一二七六年に建設を開始し、al-Madīna al-Bayḍāʼ（白い都）と名付けられるが、通常は新フェズ Fās al-Jadīda として知られる。一方、引き続き商工業の中心として発展した旧フェズは Fās al-Bālī、あるいは単に al-Madīna と呼ばれるようになった（*al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 194-197; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Fās"）。

(109) Ibn Riḍwān al-Mālaqī, Abū al-Qāsim ʻAbd Allāh ibn Yūsuf（一三一八－九～一三八一－二年）。アンダルス南部のマラガ出身でマリーン朝に書記として仕えた法学者、文人。タリーファの戦い（一三四〇年）の後、アンダルスから帰還途上のマリーン朝君主アブー・ハサンとセウタで出会ったことがきっかけでマグリブに渡り、以後約四〇年間にわたって書記としてマリーン朝に仕えた。詩人としても優れていたほか、マリーン朝君主アブー・サーリムのために政治指南の書も執筆している（*al-Taʻrīf*, pp. 41-44; J. Lirola Delgado ed., *Biblioteca de al-Andalus*, tomo 4, pp. 473-488;『歴史序説』第四巻、二二八－二二九頁）。

(110) fiqh al-wathāʼiq.

(111) Abū al-Qāsim al-Rahawī. 不詳。

(112) ラハウィーによるアブー・ハサンへの頌詩は、*al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 270-273.

(113) ikhtiyār. 占星術において、事の成就に最も適した時機を、天体の位置を元に吟味すること（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Ikhtiyārāt"; 種村季弘監修『図説占星術事典』同学社、一九八六年、一三四頁、「選択」の項）。

(114) qirān. 地球から見て、惑星と太陽、あるいは二つの惑星が同じ方向に見える時のこと。通常、木星と土星の合のことを指す。占星術においては、合はしばしば重大な政治的変化の前兆と考えられた（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Kirān"; 種村監修『図説占星術事典』五八頁、「合」の項）。

(115) shakl. アスペクト。天体同士の位置関係を、地球とそれぞれの天体を結ぶ線の角度で表したもの。「合」とは〇度のアスペクトのことであり、その他六〇度、九〇度、一二〇度、一八〇度のアスペクトなどが、占星術においては重視された（Abū Maʻšar, *On Historical Astrology: The Book of Religions and Dynasties* (*on the Great Conjunctions*), eds. & trs. Keiji Yamamoto and Charles Burnett, Leiden: Brill, 2000, vol. 2, p. 418; 種村監修『図説占星術事典』一一頁、「アスペクト」の項；S・J・テスター著、山本啓二訳『西洋占星術の歴史』恒星社厚生閣、一九九七年、四六－四七頁）。

(116) fuqarāʼ あるいは faqarāt. また、fiqarāt と読んで「蠍座の尻尾の付け根にある星」との意味もある（E.W. Lane, *Arabic-English Lexicon*, London, 1877, p. 2426）。

(117) Mūsā ibn ʻImrān. 旧約聖書の預言者モーセ。「ムーサーの炎」とは、ムーサーがアッラーの声を聞いた「燃える柴」の故事にちなむものと考えられる（『クルアーン』第二八章第二九節）。

(118) Ghassān. カフターン族（南アラブ）に属するアズド族から分かれた一集団の名前。五～七世紀にシリアのジャービヤを中心として栄えたガッサーン王家を出したこ

とで知られる（高野太輔『アラブ系譜体系の誕生と発展』山川出版社、二〇〇八年、五五－五六頁）。

(119) al-Faḍl ibn Sahl ibn Zajānfarūkh（八一八年没）とal-Ḥasan（八五〇－一年没）のイブン・サフル兄弟は、どちらもアッバース朝時代のカリフ、マームーンに仕えた人物。兄ファドルはマームーンの即位前から彼の補佐役を務め、ホラーサーン地方でマームーンがカリフを名乗って以降はワズィール位とアミール位の二つを兼任したため、Dhū al-riʾāsatayn（二つの指揮権の持ち主）と呼ばれた（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Faḍl b. Sahl b. Zadhānfarūkh”）。弟ハサンもまたマームーンに仕えた有力官僚であり、兄の死後は公職を退いたものの、娘をマームーンと結婚させるなど、マームーン政権に対し大きな影響力を維持していた（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Ḥasan b. Sahl”）。校訂者イブン・ターウィートは註において、ここでのイブン・サフルは弟ハサンのことであるとしている。

(120) Būrān（八〇七～八八四年）、本名はKhadīja bint al-Ḥasan ibn Sahl。ハサン・イブン・サフルの娘でマームーンの妻（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Būrān”）。

(121) bābirī. バビロンにおいて堕天使ハールートとマールートが人々を誘惑したというクルアーン中の故事にちなみ、ここでは人を惑わせるような魔法に対する形容として用いられている（『クルアーン』第二章第九六節; Lane, *Arabic-English Lexicon*, p. 145）。

(122) ṣanʿānī. サヌアでは、片面だけをなめした紙を二枚ずつ貼り合わせたサヌア紙が作られていたと言うが、この詩の中での「サヌア人」という語の用法については不明である（J. Pedersen, *The Arabic Book*, English translation, Princeton, 1984, pp. 63, 66）。

(123) Thabīr はメッカ近郊の山、Thahlān はナジュド地方の山（Yāqūt, *Muʿjam al-Buldān*, vol. 2, pp. 72-74, 88）。

(124) al-Aṣbaḥī. マーリク派法学の名祖マーリク・イブン・アナスの別名。ここでは「夜明け（ṣabāḥ）」という語と縁語となっている。

(125) Ashhab ibn ʿAbd al-ʿAzīz ibn Dāʾūd al-Qaysī al-ʿĀmirī al-Jaʿdī, Abū ʿAmr. エジプトの法学者で、マーリク・イブン・アナスの弟子（八一九年没）（Ibn Khallikān, *Wafayāt al-Aʿyān*, vol. 1, pp. 238-239; al-Ziriklī, *al-Aʿlām*, vol. 1, p. 333）。

(126) Saḥbān ibn Zufar ibn Iyās al-Wāʾilī. 雄弁さで知られる説教師であり、ムハンマドの時代にイスラームに改宗した（六七四年没）（al-Ziriklī, *al-Aʿlām*, vol. 3, p. 79）。

(127) 原文には fa-tazayyā とあるが、接頭辞 ta が省略されたものととらえ、第五形動詞の未完了女性単数形 tatazayyā とみなす（W・ライト『アラビア語文典』ごとう書房、一九八七年、上巻、九六頁）。

(128) al-ṣārim al-mashrafī. 剣の名前。シリアのMashārif、あるいはイエメンの同名の地名に由来するとも、Mashrafという刀鍛冶の名にちなむとも言われる（Yāqūt, *Muʿjam al-Buldān*, vol. 5, pp. 131-132; Lane, *Arabic-English Lexicon*, p. 1538）。

(129) ʿAlī ibn Abī Ṭālib. 預言者ムハンマドの女婿で四代目正統カリフ（六〇〇頃～六六一年）。書記術や散文の名手とされる。

(130)「秩序（niẓām）」と「韻文（naẓm）」とは同語根であり、「散らす者（nāthir）」には「散文（nathr）の書き手」との意味もある。この部分はアブドゥルムハイミンが韻文と散文のいずれにも通じていたことの暗喩となっている。

(131) al-Hamdhānī, Abū al-Faḍl Aḥmad ibn al-Ḥusayn. ブワイフ朝、ガズナ朝等に仕えた書記、詩人（九六八～一〇〇八年）。Badīʿ al-Zamān（「この世の驚き」）と称される（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Hamadhānī”）。

(132) Abū Ishāq Ibrāhīm ibn Hilāl al-Ṣābiʾ. アラブ世界を代表する書記の一人（九二五～九九四年）。ブワイフ朝の大アミール、ムイッズッダウラなどのもとで文書庁長官を務め、『書簡集』を残す（ヒラール・サービー著、谷口淳一・清水和裕監訳『カリフ宮廷のしきたり』松香堂書店、二〇〇三年、解題pp. xvii-xx）。

(133) al-aʿjamī. ウマイヤ朝時代の詩人Ziyād ibn Salmā Abū Umāma al-Aʿjam（七一八年没）のことを指すか。イスファハーン生まれのペルシア人で、なまりの強いアラビア語を話したと言う（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Ziyād al-Aʿdjam”）。

(134) Sībawayhi, Abū Bashar ʿAmr ibn ʿUthmān ibn Qanbar. スィーバワイヒはバスラの文法学者、その著書『書』は「文法のクルアーン」と呼ばれ、のちの文法学者の規範となった（七九六年頃没）（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Sībawayhi”）。

(135) al-Akhfash（鳥目）との名で知られる文法学者のうち、次の二人が有名。「大アファシュ」Abū al-Khaṭṭāb ʿAbd al-Ḥamīd ibn ʿAbd al-Majīd. スィーバワイヒの師にあたる（七九三年没）。「中アファシュ」Abū al-Ḥasan Saʿīd ibn Masʿada. スィーバワイヒの弟子（八三〇か八三五年没）。（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Akhfash”）。

(136) al-Fārisī, Abū ʿAlī al-Ḥasan ibn ʿAlī. 文法学者（九〇〇～九八七年）。アレッポのサイフッダウラやブワイフ朝のアドゥドッダウラに仕えた（*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Fārisī”）。

(137) チュニスを占領したマリーン朝君主アブー・ハサンに対するカイラワーン周辺のアラブ遊牧民の反乱。アブー・ハサンはアラブ遊牧民に敗れ、一時カイラワーンに籠城を迫られた（*al-ʿIbar*, vol. 7, pp. 273-276）。

(138) qaṣaba. qaṣbaとも。防壁で囲まれた支配者の居住地、城塞。主にマグリブやアンダルスで用いられる用語で、シリアやエジプトのカルアqalʿaに相当する。都市の

住民からは切り離された空間であり、都市の陥落後もそこを拠点に抵抗を継続したり、住民による反乱の際には支配者の逃げ場となったりした。チュニスのカスバの位置は、都市の北西部にあり、都市構成の中で最も高いところを占めている（ベシーム・S・ハキーム、佐藤次高監訳『イスラーム都市：アラブのまちづくりの原理』第三書館、一九九〇年、六九－七〇頁）。

(139) Ibn Tāfrākīn, Abū Muḥammad ʻAbd Allāh ibn Aḥmad ibn ʻAbd al-ʻAzīz（一三六四年没）。ターフラーギーン家はムワッヒド朝初期からの功臣で、その後チュニスでハフス朝にも仕えた一族。Tāfrājīnと綴られることもあるが、これはベルベル語のg音をアラビア文字で表記する際に、kやjの文字で代用するため。アブー・ムハンマド・アブドゥッラー・イブン・ターフラーギーンは、ハフス朝君主アブー・ヤフヤー・アブー・バクル二世のもとでハージブに任じられたが、マリーン朝君主アブー・ハサンのチュニス征服に際してはこれに協力して案内役を務めた。しかし、本文中にあるようにカイラワーンの戦いに際してマリーン朝と袂を分かち、マムルーク朝のスルターン代理Baybughā Urūs のもとへ亡命した。メッカ巡礼後の一三五〇年に再びチュニスへ戻ってハフス朝君主アブー・イスハーク二世のもとで実力者となり、一三六四年に同地で没した（*al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 348-350, 360-361, 377-378; Ibn Ḥajar al-ʻAsqalānī, *al-Durar al-Kāmina fī Aʻyān al-Miʻa al-Thāmina*, Hyderabad, 1929-1932, vol. 2, pp. 243-244; al-Maqrīzī, *al-Muqaffā al-Kabīr*, Beirut: Dār al-Gharb al-Islāmī, 1991, vol. 4, pp. 434-436）。

(140) Ibn Abī Dabbūs, Aḥmad ibn ʻAbd al-Salām ibn ʻUthmān. ムワッヒド朝最後のカリフ・アブー・ダッブースの後裔。一二六九年のマラケシュ陥落後、一族は四散したが、祖父のʻUthmānの頃にトリポリに勢力を確立、アラブ遊牧民Kaʻūb族の長となる。カイラワーンを巡ってマリーン朝のアブー・ハサンと争うが、これに敗れて捕われる（*al-ʻIbar*, vol. 6, pp. 359-360; Ibn Ḥajar, *al-Durar al-Kāmina*, vol. 1, pp. 171-172; al-Maqrīzī, *al-Muqaffā al-Kabīr*, vol. 1, pp. 495-496）。

(141) *al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 273-276.

(142) Sūsa. イフリーキヤ東部の港町。

(143) ブーラーク版では「への賞賛のため（li-ḥamdi）」に代わり「ムハンマドよ（Muḥammadu）」とある（*al-ʻIbar*, vol. 7, p. 387）。

(144) ここでは著者の父親のことを指す。

(145) 註99および註101参照。

(146) Barishk. アルジェ西方の地中海沿岸の丘に位置する小さな町（al-Ḥimyarī, *al-Rawḍ al-miʻṭār fī khabar al-aqṭār*, ed. Iḥsān ʻAbbās, Beirut: Librarie du Liban, 1975, p. 88）。

(147) Zīrim ibn Ḥammād（一三〇八－九年没）。バリシュクを支配し、一二八四－五年以降、たびたびザイヤーン朝に反抗した。ザイヤーン朝君主アブー・ハンムーに投降した際、イブン・イマーム兄弟の父の復讐として、殺害された。彼の名は正しくはZīrīだが訛ってZīrimと発音されるのだとイブン・ハルドゥーンは述べている（*al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 99-100）。

(148) Abū ʻAbd Allāh ibn Shuʻayb al-Dukkālī（一二二五年没）。現在のモロッコ地域出身のマーリク派法学者で、チュニスに住み着いた（『歴史序説』第三巻、一五三頁）。

(149) ḥaẓẓ wāfir. イスラームの知識とはすべて預言者からの遺産であり、知識人が広く学問を修めるという行為は遺産配分を多く受け取ることに他ならない、とする考えによる（森山央朗「知識を求める移動：ハディース学者の旅の重要性の論理」『歴史のなかの移動とネットワーク』メトロポリタン史学会編、桜井書店、二〇〇七年、一〇三頁）。

(150) al-Jazāʾir. 現在のアルジェリアの首都。ベルベル人サンハージャ族の氏族名にちなみ、Jazāʾir Banī Mazghannāyとも。一〇世紀に建設され、一二世紀にはムラービト朝によりモスクが建造されたが、オスマン統治期以前は小規模な都市であった（Yāqūt, *Muʻjam al-Buldān*, vol. 2, p. 132; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "al-Djazāʾir"）。

(151) al-Maghrib al-Aqṣā. 直訳すると「最も遠いマグリブ」でおおむね現在のモロッコを指す地域名称。一般にリビア砂漠以西の北アフリカをマグリブと呼ぶが、そのうち「中央マグリブ（al-Maghrib al-Awsaṭ）」より西の地域を指す。イブン・ハルドゥーンの時代には、マリーン朝の版図にほぼ相当する。また、彼が単に「マグリブ」というときには、この「奥マグリブ」を指すことが多い。

(152) Abū Yaʻqūb Yūsuf ibn Yaʻqūb ibn ʻAbd al-Ḥaqq. マリーン朝君主アブー・ヤアクーブ・ユースフ（在位一二八六～一三〇七年）。註98にあるように、ザイヤーン朝の首都トレムセンを長期間にわたって包囲したが、これを攻め落とすことができなかった（*al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 210ff; Baybars al-Manṣūrī, *Zubdat al-Fikra fī Taʾrīkh al-Hijra*, ed. D.S. Richards, Beirut, 1998, pp. 329, 389-391; al-Maqrīzī, *al-Sulūk li-Maʻrifat Duwal al-Mulūk*, ed. Muṣṭafā Ziyāda, Cairo, 1939-1958, vol. 2, p. 32; Ibn Ḥajar, *al-Durar al-Kāmina*, vol. 4, pp. 480-482）。

(153) Milyāna. アルジェの南西九一キロメートルに位置する都市。（Yāqūt, *Muʻjam al-Buldān*, vol. 5, p. 196; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Milyāna"）。

(154) Shalaf. アルジェ南方の山岳地帯から発してムスタガーニムへと西流するシャラフ川沿いに東西に広がる中央マグリブ平野地帯。

(155) Maghrāwa. ベルベル系の部族連合の名であり、ザナータ系ベルベル諸族の中でも最大規模を有する。イブン・ハルドゥーンによればシャラフ地方を故地とする（*al-ʻIbar*, vol. 7, p. 24; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Maghrāwa"）。

(156) al-Ḥasan ibn ʻAlī ibn Abī al-Ṭallāq. 一四世紀初頭のマリーン朝の部族指導者・将軍。

アスカル家はマリーン朝の支族に位置づけられている。このときのシャラフ地方での軍事行動については、*al-ʻIbar*, vol. 7, p. 67参照。

(157) ʻAlī ibn Muḥammad al-Khayrī. 同様に一四世紀初頭のマリーン朝の部族指導者・将軍。ワルターッジャン家も同様にマリーン朝の支族。

(158) Mandīl ibn Muḥammad al-Kinānī（一三一八年没）。父も書記で、ムワッヒド朝とマリーン朝の双方に仕えた。彼はマリーン朝君主アブー・ヤアクーブに仕えたが、次のアブー・サービトの時、一三一八年獄死した（*al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 245-246; Ibn al-Qāḍī, *Jadhwat al-Iqtibās*, p. 438）。

(159) 七〇六／一三〇七年の誤り。イブン・ハルドゥーン自身も『省察すべき実例の書』の中ではこの事件を七〇六／一三〇七年のこととしている（*al-ʻIbar*, vol. 7, pp. 97, 233）。また、マシュリクにもスルターン・ユースフの殺害を七〇六年の出来事として伝える史料がある。それによると、彼はヘンナで髭を染めている間に宦官の一人に刺されて死亡した。彼の没後、息子のアブー・サーリムが即位するがまもなく殺害され、さらにその甥のアブー・サービトが擁立される。アブー・サービトは祖父を殺害した宦官を捕らえて処刑し、さらに宦官すべてを処刑して遺体を焼き、彼の治世を通して宦官は置かれなくなったという（Baybars al-Manṣūrī, *Zubdat al-Fikra*, pp. 389-391）。

(160) Abū Thābit ʻĀmir ibn Abī ʻĀmir ʻAbd Allāh ibn Abī Yūsuf Yaʻqūb. マリーン朝君主アブー・サービト（在位一三〇七～一三〇八年）。

(161) Abū Zayyān Muḥammad ibn Abī Saʻīd ʻUthmān ibn Yaghmurāsan. ザイヤーン朝第第三代君主アブー・ザイヤーン・ムハンマド（在位一三〇三～一三〇八年）。

(162) 註103参照。後に兄弟アブー・ザイヤーンの後を継いでザイヤーン朝第四代君主となる。

(163) このエピソードは、*al-ʻIbar*, vol. 7, p. 100にも記されている。

(164) Abū Tāshfīn ʻAbd al-Raḥmān ibn Abī Ḥammū Mūsā. ザイヤーン朝第五代君主（在位一三一八～一三三七年）。

(165) wāqiʻat Ṭarīf. スペイン史では「サラード川の戦い」として知られる。一三四〇年、アブー・ハサンはナスル朝ユースフ一世の要請を受けてアンダルスに渡り、キリスト教徒に占領されていたタリーファを奪還すべく包囲した。これをカスティーリャ王アルフォンソ一一世とポルトガルの連合軍が撃退した戦い。これ以降マリーン朝はイベリア半島から撤退し、ナスル朝はイベリア半島において孤立することとなった（*al-ʻIbar*, vol. 7, p. 261; 関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系　スペイン史一　古代－近世』、山川出版社、二〇〇八年、一二二頁）。

(166) 原語はmutawaqqiīn qulal-hā。ブーラーク版ではこの箇所は、「その地で尊敬されている（muwaqqarīn fī-hā）」とある（*al-ʻIbar*, vol. 7, p. 389）。

イブン・ハルドゥーンゆかりの地を訪ねて — チュニス

チュニス新市街中心部にあるイブン・ハルドゥーン像

イブン・ハルドゥーンが生まれたと伝わる家。チュニス旧市街に位置する。

イブン・ハルドゥーンが幼少期に最初の教育を受けたと伝わるクッバ・モスク。同じくチュニス旧市街に位置する。